

## 戦争体験「語り」の継承とアーカイブ (6)

— 広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「家族証言者」を事例として —

外 池 智  
(秋田大学教育文化学部)

### Study about inheritance of telling war experience (6) - Hiroshima "a-bomb survivors legend" and Nagasaki "Exchange evidence" as a case study-

TONOIKE, Satoshi

#### Abstract

This study is in published studies on the development of peace education of the next generation using hierarchical archiving working from 2015, continuing research studies on the inheritance of war has promoted research on war-related sites are promoted from the 2009 fiscal year, 2012 year telling.

Age of war after World War II 71 years have passed, and talk about the experience of war if 10-year-old, no longer the population total population 8%. Narrative in such a situation, a direct war experience, not by using the hierarchical archive should be called "peace education of the next generation" so to speak, practice is ever-changing and expanded.

Nagasaki has been approached from the city of Hiroshima last year continue to be tackled from fiscal year 2012 (Heisei 24), such circumstances "a-bomb survivors tradition" and 2014 (Heisei 26) year "Family survivors and take" Exchange witnesses".

**Key Word :** Study about inheritance of telling war experience Practice of Hiroshima "a-bomb survivors legend", Nagasaki a-bomb experience about (family evidence) promotion project

#### 1. 本研究の目的

本研究は、2009（平成 21）年度から推進している戦争遺跡に関する研究<sup>1</sup>、2012（平成 24）年度から推進している戦争体験「語り」の継承に関する研究<sup>2</sup>、2015（平成 27）年度から取り組んでいる継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の展開に関する研究<sup>3</sup>の継続研究であり、さらに今年度から取り組んでいる「地域の継承的アーカイブと学習材としての活用」に関する研究<sup>4</sup>の一端を発表するものである。

戦後 73 年の歳月が経ち、戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に 10 歳とすれば、もはやその人口は全人口の約 8% となった。こうした状況の中、あの貴重な体験や記憶を残し、継承していこうとする試みが続いている。また教育現場においても、直接的な戦争体験の「語り」ではなく、そうした継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育<sup>5</sup>」と呼ぶべき実践が次々と展開されている。

本稿では、今年度で 4 年目となった秋田大学での講話で、広島市「被爆体験伝承者」と長崎市「家族証言者」の「語り」を取り上げたい。これまでの様に、文字起こしによりプロット毎の「語り」の時間、文字数からの量的分析、また聴講者からのアンケート結果（自由記述）からの質的分析により検討していきたい。

#### 2. 2018（平成 30）年度 広島市「被爆体験伝承者」講話と長崎市「家族証言」講話

今年度で、秋田大学に広島市「被爆体験伝承者」をお招きして講話をしていただくのは 4 年目になる。今年度に来ていただいたのは広島市「被爆体験伝承者」養成事業の第 1 期生の山岡美知子氏で、4 年連続で第 1 期生をお呼びする事になった。また、長崎からは 3 年目になるが、今年度は再び「家族証言者」で、平田周氏に来ていただいた。ここでは、このお二人の講話を取り上げる。

### (1) 広島市「被爆体験伝承者」養成の概略

広島市「被爆体験伝承者」養成は<sup>6</sup>、2012（平成24）年度より広島市市民局国際平和推進部平和推進課が中心となり、広島市「被爆体験伝承者」養成プロジェクトとして進められてきた事業である。本プロジェクトの目的は、以下の通りである。

被爆者の高齢化が進み、被爆体験を直接語り継ぐ事ができる方が減少している中、被爆者の被爆体験や平和への思いを次世代に確実に伝えるため、被爆体験証言者の被爆体験等を受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」を養成する<sup>7</sup>。

本事業の養成期間は、3年間である。その概略は、初年度の場合、2012（平成24）年度は研修（平和文化センターが委嘱している証言者による被爆体験講話の聴講）、証言者と伝承候補者の交流会、2年目の2013（平成25）年度は証言者と伝承候補者とのマッチング、証言者から伝承候補者への被爆体験等の伝授、そして最終年度の2014（平成26）年度は講話実習として、実際の「語り」の実践と伝承者の認定となっていた。

この養成プロジェクトは、その後も毎年継続的に募集され、基本的な養成プログラムは大きな変更はなく毎年踏襲されている。

また、初年度からの応募者数と、2018（平成30）年9月28日現在の広島文化センターにおける登録者数は以下の資料1の通りである。

#### 資料1 広島市「被爆体験伝承者」応募者数と登録者数

	応募者数	委嘱者数
2012（平成24）年度	137	56
2013（平成25）年度	68	24
2014（平成26）年度	44	10
2015（平成27）年度	69	27
2016（平成28）年度	47	－
2017（平成29）年度	47	－
2018（平成30）年度	72	－
合計	484	117

・委嘱者数は、2018（平成30）年9月末時点の人数。

・広島市市民局国際平和推進部平和推進課山田智春氏からの提供資料（2018年9月28日）による。

### (2) 長崎市「家族証言者」「交流証言者」養成

長崎市被爆継承課平和学習係では、2014（平成26）年度より長崎市「語り継ぐ家族の被爆体験（家族証言）」推進事業を開始した<sup>8</sup>。この事業の「概要」は、以下の通り説明されている。

被爆者が高齢化し被爆体験を継承する機会が少なく

なっている中で、被爆を経験していない世代が被爆体験を語り継ぐ「家族・交流証言者」を募集する。さらに継承を望む被爆者（家族・交流証言者に自身の体験を託したいかた）の募集も行い、被爆の実相の次世代への継承を推進する<sup>9</sup>。

#### 資料2 長崎市「家族証言者」「交流証言者」講話可能者内訳（2018年9月30日現在）

区分		家族証言者	交流証言者
登録者数		11人	10人
平均年齢		56.7歳	44.2歳
最高齢		74歳	76歳
最年少		30歳	16歳
年齢階層	10代	0人	1人(10.0%)
	20代	0人	3人(30.0%)
	30代	1人(9.1%)	0人
	40代	1人(9.1%)	2人(20.0%)
	50代	4人(36.4%)	1人(10.0%)
	60代	2人(18.2%)	1人(20.0%)
性別	男性	2人(18.2%)	1人(10.0%)
	女性	9人(81.8%)	9人(90.0%)
住所地	長崎市内	8人(72.7%)	9人(90.0%)
	長崎市外の県内	2人(18.2%)	0人
	県外	1人(9.1%)	1人(10.0%)

・長崎市被爆継承課平和学習係三根礼華氏提供資料（2018.10.1）により作成。

事業開始当初は、「家族証言」を語る「家族証言者」の募集として開始されたが、2016（平成28）年度から「交流証言者」を加え、「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）推進事業」となっている。「家族証言者」とは、「被爆者の子、孫等の家族、及び被爆者と親戚関係にある者」であり、また「交流証言者」は、「同居や団体活動などにより被爆者との密接な交流経験を有する者」または「被爆者と関わりはないが、体験を継承する意志の強い者」である<sup>10</sup>。

また、その養成プログラムは広島市「被爆体験伝承者」養成とは大きく異なり、ほぼ半年間で、「養成」というよりは「支援」に近い形で証言者の自立を促している<sup>11</sup>。

また、現在（2018年9月30日）の「家族証言者」と「交流証言者」の講話可能者の内訳は資料2の通りで、「家族証言者」は11名、「交流証言者」は10名である。

講話可能者の年齢について、「家族証言者」平均年齢は56.7歳で、の最少年齢は30歳、最高年齢は74歳、一方の「交流証言者」の平均年齢は44.2歳で、最少年齢は16歳、最高年齢は76歳であった。

次に性別では、「家族証言者」は男性2人（18.2%）、女性9人（81.8%）で女性が8割以上を占める。一方、「交流証言者」は1人（10.0%）、女性9人（90.0%）でほん

とどが女性である。

次に申し込みの所在地では、「家族証言者」、「交流証言者」ともほとんどが長崎市内の方である。

### (3) 講話の実際 (広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「家族証言者」講話)

#### ①講話の日程と講話者の略歴

2018 (平成 30) 年度は、7 月 26 日 (木) に講話を実施した。主な日程は以下の通りである。講話時間は、それぞれご本人と相談し、基本的には例年同様に山岡氏は 1 時間、平田氏は 40 分でお願ひした。

- 14:20 ~ 14:45 受付
- 14:45 ~ 15:00 基調報告 (外池 智)  
「広島市『被爆体験伝承者』・長崎市『家族証言者』講話—戦争体験『語り』の継承—」
- 15:00 ~ 16:00 広島市「被爆体験伝承者」講話  
(山岡美知子氏)
- 16:00 ~ 16:10 休憩
- 16:10 ~ 16:40 長崎市「家族証言者」講話  
(平田周氏)
- 16:40 ~ 17:10 質疑応答

講話実施の順に、まず広島市「被爆体験伝承者」講話の山岡美知子氏の略歴について取り上げる。山岡氏は、1950 (昭和 25) 年、広島県江田島市生まれ、講話時 67 歳。両親は被爆者で被爆二世である。父親は、当時 20 歳で原爆投下の翌日 8 月 7 日に広島市内に入っている。40 年後慢性白血病になり 14 年間闘病生活をおくり、74 歳で亡くなった。母親も当時 20 歳で、爆心地から 3.5km の所で被爆した。2016 (平成 28) 年 11 月に亡くなっている。また、母の妹は当時 13 歳で、建物疎開中に被爆し、8 月 10 日に亡くなった。山岡氏は、2008 (平成 20) 年 4 月から平和公園でボランティアガイドを始めている。独学で学んだ英語でもガイドを務めている。その後、



広島市「被爆体験伝承者」山岡美知子氏

2015 (平成 27) 年には広島市「被爆体験伝承者」第 1 期生として無事養成課程を修了し、日本人のみならず外国の方に対しても 90 カ国、約 15,000 人の講話やガイドを実施している。正確な講話数は不明であるが、ご自身のお話では、「被爆体験伝承者」としては、最も講話やガイドを実施しているお一人であるとの事である。

次に、長崎市「家族証言者」講話の平田周氏の略歴について取り上げる。平田氏は、1958 (昭和 33) 年、長崎市生まれ、講話時 59 歳。原爆俳人松尾あつゆきの長女みち子の長男で被爆二世ある。1981 (昭和 56) 年に長崎大学経済学部卒業。現在、長崎県西彼杵郡長与町内で小・中学生向けの学習塾運営の傍ら、祖父や母の被爆体験の継承に力をそそいでいる。長崎市「家族証言者」の第 1 期生である。編著に『松尾あつゆき日記』(長崎新聞社)、復刊『原爆句抄』、著書に『このかなしき空は底ぬけの青』、原著に『子らと妻を骨にして』(書肆侃房) 等がある。



長崎市「家族証言者」平田周氏

#### ②講話の構成と内容

実施した講話のお二人のプロットは、以下の資料 3、資料 4 の通りである。

#### 資料 3 山岡美知子氏による広島市「被爆体験伝承者」講話 (60 分 5 秒, 16,608 文字)

- 自己紹介、イントロダクション (2 分 45 秒 (3.5%), 494 文字 (3.0%))
- 1. 当時小学 3 年生の被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた子供たちの生活 (6 分 20 秒 (10.5%), 1,201 文字 (7.2%))
- 2. 原爆について (28 分 18 秒 (47.1%), 8,105 文字 (48.8%))
- 3. 当時 20 歳の母が見た被爆した広島の様子 (10 分 8 秒 (16.9%), 2,901 文字 (17.5%))
- 4. 被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた原爆孤児の事 (3 分 46 秒 (6.3%), 1,016 文字 (6.1%))
- 5. 核兵器について (3 分 39 秒 (6.1%), 987 文字 (5.9%))
- 6. 核兵器のない平和な世界を目指して (7 分 6 秒 (11.8%), 1,904 文字 (11.5%))

・1~6 のタイトルは、山岡美知子氏講話時使用の PowerPoint から引用。「○自己紹介、イントロダクション」は文字起こしから追加。

資料4 平田周氏による長崎市「家族証言者」講話(46分40秒, 9,969文字)

- 自己紹介(35秒(1.3%), 155文字(1.6%))
1. 祖父松尾敦之の肉声(1分25秒(3.0%), 337文字(3.4%))
  2. 長崎市への原爆投下(4分15秒(9.1%), 1,041文字(10.4%))
  3. 祖父松尾敦之の紹介(2分05秒(4.5%), 469文字(4.7%))
  4. 松尾敦之の日記による被爆体験(33分00秒(70.7%), 6,850文字(68.7%))
  5. 母の戦後と私(5分20秒(11.4%), 1,117文字(11.2%))

・平田周氏講話時使用のパワーポイント及び資料8の内容から筆者作成。

実際の講話の内容は、資料5(巻末)、資料6(巻末)の通りである。講話から質疑応答まで、全文掲載してある。また、山岡氏が継承した岡田恵美子氏の「被爆体験伝承者」養成プロジェクト時のプロフィールは、資料7(巻末)の通りである。

内容の構成は、当然ながらお二人とも違いはあるが、その中核となる部分については、基本的に以下の4点と共通している<sup>12</sup>。

- ・原爆投下までの歴史的背景や生活の様子
- ・被爆の実相
- ・被爆体験の「語り」
- ・平和への願い

これは、これまで実施した広島市「被爆体験伝承者」講話、すなわち2015(平成27)年の高岡昌裕氏、2016(平成28)年の植原泰一氏、2017(平成29)年の藤井幸恵氏、さらに、2016(平成28)年の長崎市「家族証言者」講話の佐藤直子氏、そして2017(平成29)年の長崎市「交流証言者」講話の松野世菜氏においても同様のものがあった。被爆体験の伝承講話としては、スタンダードな構成といえる。

次に、文字起こしをした資料5、資料6について、プロット毎の「語り」の時間、文字数の量的分析から指摘したい。

まず山岡氏氏の講話は、文字起こし分の時間で60分5秒、文字数だと16,608文字であった。一方の平田氏の講話は、文字起こし分の時間で46分40秒、文字数だと9,969文字であった。

注目したいのは、やはり「語り」の継承部分である。山岡氏の場合は、「3. 当時20歳の母が見た被爆した広島の様子」の部分と「4. 被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた原爆孤児の事」の部分で、時間では前者が10分8秒(16.9%)、後者が3分46秒(6.3%)で、合わせると13分54秒(23.1%)、文字数では前者が2,901

文字(17.5%)、後者が1,016文字(6.1%)で、合わせると3,917文字(23.6%)あった。今回の講話では、肝心の継承部分の「語り」は、時間も文字数も全体の1/4程であったのである。一方で、「2. 原爆について」の部分は、時間で28分18秒(47.1%)、文字数では8,105文字(48.8%)で、時間も文字数も約半分を占めていた。タイトルは、「2. 原爆について」であるが、内容は原爆の開発、投下までの過程、投下後の被害(爆風、熱線、放射線、市内の様子)、爆心地の様子とかなり詳細な内容になっており、原爆投下そのものの実相が、むしろ中心的な「語り」となっていた事が分かる。実は、これには理由があり、後に詳述したい。また、注意しておきたいのは、山岡氏の場合は「被爆体験伝承者」ではあるが、ご自身は被爆二世である事である。また、講話内容にも実際に母の被爆体験の「語り」が構成されている。すなわち、山岡氏の場合は長崎市の「家族証言者」と同じ立場なのである。これまで秋田にお招きした広島市「被爆体験伝承者」では、初めてのケースである。

一方の平田氏の場合、「語り」の継承部分は「4. 松尾敦之の日記による被爆体験」の部分で、時間で33分00秒(70.7%)、文字数では6,850文字(68.7%)、全体の7割を占めた。さらに、実際は「○自己紹介」と「2. 長崎市への原爆投下」の部分以外は、全て祖父の松尾敦之氏、母みち子氏に関わる話であり、時間で40分40秒(87.3%)、文字数では8,773文字(88.0%)と講話全体のほぼ9割を占めていた。まさに被爆体験の「語り」が中心的な講話になっていた事が分かる。これは、直前に実施した山岡氏の講話で、原爆の説明が詳細になされた影響である。平田氏の本来の講話では、もう少し一般的な原爆の説明や歴史的背景、そして長崎市全般の被爆の様子が取り扱われる。しかし、直前の山岡氏の講話でかなり詳細に原爆についての説明がなされたので、それを踏まえて内容を再構成したのである。

加えて注目したいのは、確かに平田氏の講話の場合は、祖父である松尾敦之氏、母であるみち子氏の被爆体験の話が中心であったのだが、その内容は被爆体験者の「語り」から受け継いだ講話とは違い、祖父松尾敦之氏が残した日記と俳句、さらにマンガを加えた朗読が中心的内容になっていた事である。すなわち、被爆体験の伝承の「語り」というより、むしろ朗読劇に近い方法であったのである。長崎市の「家族証言者」では、一昨年に登録第1号者である佐藤直子氏を秋田大学にお呼びしたが、佐藤氏の場合もユニークで、肝心の父である池田早苗氏の被爆体験部分は紙芝居であった<sup>13</sup>。そして、今回の平田氏の場合は、まるで完成された朗読劇に近い被爆体験の日記と俳句の朗読、さらにはマンガの提示であった。広島市「被爆体験伝承者」講話と長崎市「家族証言者」

講話を比較すると、前者はいわばスタンダードな「語り」であり、後者は独創的な「語り」である事が分かる。これについても、後に詳述したい。

### ③参加者の感想

参加者は、秋田大学教育文化学部の社会科教育の免許取得科目を受講している学生と院生 19 名、一般参加者 6 名、その他 NHK 秋田放送局、ABS 秋田放送、秋田魁新報社等のマスコミ関係者であった。

聴講したアンケートとして 2 点、「○実際にそれぞれの『語り』を聞いた感想・意見等をお聞かせください。1. 広島市『被爆体験伝承者』講話, 2. 長崎市『家族証言者』講話」を記入してもらっている(資料 8 参照)。回収数は、「1. 広島市『被爆体験伝承者』講話」については 22 件、「2. 長崎市『交流証言者』講話」については 17 件であった。こうしたアンケート結果について、記述の内容から質的分析を試みたい。

#### 1) 広島市「被爆体験伝承者」山岡美知子氏の講話への感想・意見

まず、広島市「被爆体験伝承者」の、山岡美知子氏の講話への感想・意見を取り上げる。山岡氏は、前述した様に、現在の広島市「被爆体験伝承者」の中でも最も多くの講話を実施しているお一人で、外国人の方々に対しても英語を駆使し多くの講話を実施している。そうした広島市「被爆体験伝承者」を代表する語り手の「語り」を聴講した学生達は、どのような感想・意見をもったのだろうか。ここでは、多い順に 5 点取り上げたい。

まず最も多かった感想は、これから教師を目指すものとして子ども達にしっかりと伝えていきたい、一緒に考えていきたいとの感想で、全 22 件中 8 件<sup>14</sup> (36.4%) であった<sup>15</sup>。例えば、(1-1)「私も原子爆弾のことをしっかり勉強をして、子どもたちにもしっかりと伝えられるようにしていきたいです」、(1-4)「今後教員を志すものとして、この『切実性』をどのように後世に伝えていくのかを考えていきたい」、(1-10)「自分が教壇に立った時、ここで聞いた話を子どもたちの前で話すのは、簡単なことではない。被害者の思いや被爆者家族の平和への思いなど、全てを受け継ぐ覚悟が必要だと思う。しかし、それを学んでいくことが、平和への一歩だと思っている」等の感想である。参加している学生達は、基本的には小中学校や高等学校の社会系教科の教員を目指している。これまでの感想でも、多い感想である。

次は、実際の体験者の様なリアリティがあったとの感想で、全 22 件中 7 件<sup>16</sup> (31.8%) であった。例えば、(1-2)「今年で 3 回目になるのですが、毎回違う方の話を聞くと、考えさせられました。実際の話を経験した家族が当

時のことについて話をしてもらうのは、非常にリアルで自分のことのように受け止められます」、(1-4)「熱線、爆風、放射線による原爆の被害の悲惨さが、ひしひしと伝わってきた。教科書だけでは決して感じるこののできない『切実性』を感じた」、(1-18)「私は、この話を聞くまで、広島原爆の悲惨さが分かりませんでした。自分のこととして捉えることが、このお話を聞いてから少しできるようになったと思います」等の感想である。こうした感想の原因は、一つには一昨年の中原泰一氏、昨年の藤井幸恵氏と同様に、今回の山岡氏の場合もパワーポイントによる視聴覚資料の効果的活用によるものであろう。山岡氏は、中原氏の 91 枚、藤井氏の 61 枚をはるかに上回る 162 枚のシートを使用していた。その内訳は、多い順に写真 87 枚<sup>17</sup>、文字資料 29 枚、モデル図 18 枚、絵画 12 枚、地図 8 枚、グラフ 3 枚、絵画と写真の複合 3 枚、写真と地図の複合 2 枚で、こうした視覚に訴える資料の活用が、「語り」をよりリアリティのあるものにしたのである。被爆体験の伝承としての「語り」を基本に、多様な視聴覚資料を合わせた「語り」の効果であろう。これについては、後に詳述したい。

また、加えて指摘しておきたいのは、全体のほぼ半分を占めた「2. 原爆について」の詳細な説明である。前述した様に、山岡氏の今回の「語り」では、「2. 原爆について」の部分が時間で 28 分 18 秒 (47.1%)、文字数では 8,105 文字 (48.8%) で、時間も文字数も約半分を占めており、中心的な「語り」となっていた。その内容は、原爆の開発、投下までの過程、投下後の被害(爆風、熱線、放射線、市内の様子)、爆心地の様子とかなり詳細な内容になっており、特に爆風、熱線、放射線の「語り」については、現象としてかなり詳細な説明がなされ、聞く者にまるで実際に体験をしたかの様な臨場感を与える「語り」になっていた。いわば「現象的語り<sup>18</sup>」の効果的活用である。聴講者の感想でも、(1-6)「当時の写真から当時の様子、被害がしっかりと伝わった。原爆とはいったいどんなものだったのかというものをくわしく話されていたので、原爆の恐ろしさを再認識することができた」、(1-10)「原爆投下の効果を測る測定器、1 年前からの投下練習、投下ポイントの確認など用意周到な計画の下実行されたことがよく分かった」、(1-16)「原爆の被爆者の体験だけではなく、当時の状況や原爆にまつわる話もあり、当時のことを知る事ができました」等の感想から何うことができる。すなわち、被爆体験者の伝承としての「語り」だけではなく、その体験の背景となる原爆そのものの詳細で丁寧な解説こそ、今回の山岡氏の「語り」の最も特徴ある点でなのである。これについては、その理由があり、後に詳述したい。

次に 3 番目は、戦争を二度と起こしてはならない、平

和を目指すとの感想である。全22件中6件<sup>19</sup> (27.3%)であった。例えば、(1-5)「過ちを繰り返さないために、もっと戦争のことを知らなければならないし、また、知らせていかなければならないと感じた」、(1-6)「核の問題は日本だけでなく、世界のどこにでも核の危険は存在する。平和への意識を一人ひとり持つことが重要で、自分もその一員であるということに改めて気づかされた時間だった」、(1-7)「戦争という過ちを二度と起こさないようにということを唯一の被爆国である日本が先頭に立って進めていかなければいけないと感じました」等の感想である。これもまた、例年多い感想である。また、山岡氏の「語り」の構成の関係で、最後に「6. 核兵器のない平和な世界を目指して」で結ばれていた影響もある。

また、アメリカを始めとする海外の動向や核に関わる世界の情勢についての感想も、全22件中6件<sup>20</sup> (22.7%)であった。例えば、(1-3)「海外の方々と相手にお話をされることのあることでしたが、そのとき、海外の方はどのような反応、感想なのだろうか、という点について気になりました。質問にお答え頂きありがとうございました。海外の方にも真実を伝えたいという山岡さんの情熱に感服しました」、(1-19)「被害を受けた日本だけでなく、加害者のアメリカがその時どういった作戦行動をとったのか、客観的に話されていて意外という心境を受けた」等の感想である。これは、山岡氏自身のこれまでの海外での講話や外国人の方々を対象とした講話実績に加えて、講話の内容構成の最後で「6. 核兵器のない平和な世界を目指して」で結ばれていた事、また質疑応答での最初の質問の影響であろう。

また最後に、原爆投下の意義について述べている感想が全22件中4件<sup>21</sup> (18.2%)あった事も取り上げておきたい。例えば、(1-11)「原爆というものが、戦争を終わらせるものではなく、前々から計画されたものという話をはじめ聞き、とても驚きました」、(1-13)「これまで原爆が落とされたことは、戦争を終わらせるために必要なことであると考えていたが、戦争が終わるために必要なことだったというよりは核実験の一環だったと知り、とても貴重な話をしていただけたと感じた」等の感想である。これは、やはり冒頭の「○自己紹介、イントロダクション」における山岡氏の投げかけに加えて、質疑応答の最初の質問で、この問いかけ<sup>22</sup>についての応答内容の影響であろう。原爆投下によって戦争の終結に結びついたとの意見は、例えば教科書にも記されている。しかし、この質疑応答部分では、山岡氏は実は戦争終結時にあっては、必ずしも投下の必然性はなかったとの見解を説明していた<sup>23</sup>。その事による影響であろう。

## 2) 長崎市「家族証言者」平田周氏の講話への感想・意見

次に、長崎市「家族証言者」の平田周氏を取り上げたい。長崎では、2014(平成26)年から「家族証言者」を募集したが2年で頭打ちになり、2016(平成28)年度から本格的に「交流証言者」を募集した。最初に長崎から秋田大学にお呼びした2016(平成28)年度では、「家族証言者」の佐藤直子氏が来てくださった。次の2017(平成29)年度では、初めて「交流証言者」として松野世菜氏をお呼びした。そして、今年度は再び「家族証言者」の講話となった。前述した様に、まるで朗読劇の様な講話に聴講者は、どのような感想・意見をもったのだろうか。ここでは、4点取り上げたい。

まず最も多かった感想は、日記の朗読、静かな語り口にも関わらず心に響いたとの感想で、全17件中10件<sup>24</sup> (58.8%)であった。例えば、(2-15)「あつゆきさんの生活に基づいたお話は、とても切実性がありました。日記という形式をとっていた点でも、原爆の悲惨さを日常に絡めて伝えているように感じました」、(2-19)「とても、同情をし尽くしても同情になり得ない、壮絶な記録だった。『花びらのような骨』『四枚の爆死証明』…今まで経験したことの無い話し方で、それなのに自分でも驚く程心痛し、無情の気持ちで溢れてきた。改めて、今日御話を聞く事が出来て良かったと思いました」、(2-20)「平田氏のお話に、そのあまりの悲しみと魂の祖父の体験の声に言葉がありません。松尾あつゆき氏の自由律俳句、日記に心を打たれ、その家族の悲しみを一身に背負い語って下さった平田氏の『語り』は、多くの方々に平和のために行動することの大切さを喚起していることでしょう」等の感想である。まるで一つの朗読劇を観る様な「語り」で、しかもその物静かな独特の語り口は、多くの聴講者の心に響いた様である。一昨年お呼びした佐藤直子氏の紙芝居の場合も、小学生ではなく大学生を中心とした聴講者を前にどうなるのだろうかかと危惧があったが、実際に講話を聴いた聴講者からの意見は実に肯定的なものが多かった<sup>25</sup>。そして、今回の平田氏の場合も、最も多い感想となったのである。

次に多かった感想は、やはりこれから教師となった時に子ども達と考えていきたい、あるいは次世代に伝えていきたいとの感想で、全17件中7件<sup>26</sup> (41.2%)であった。例えば、(2-2)「戦争が起こりうる雰囲気のようなものがある中で、子どもたちが戦争の実態を知り、考えることが大切であり、教師として私も考えていきたいです」、(2-3)「ありのままに戦争を伝えようとする事について、自身も教員になり、戦争について、平和について、子どもたちに教える立場になった時、肝に銘じておきたい。そのためにも真実を伝えることができるだけの知識を身につけていきたい」、(2-12)「戦争を実体験し

てきた世代は高齢化が進み、我々が引き継いでいかなければならない。広く正確な事実を伝えていかねばならないと感じた」との感想である。基本的に教員養成系の学生が聴講者の中心なので、当然多くなる感想である。

次に多かったのは、やはり平和を築く大切さ、これからの行動に関する感想で、全17件中5件<sup>27</sup>(29.4%)であった。例えば、(2-1)「平和な社会を築いていくためにも世界が一つになることはとても大切です。今、ここにいる私たちが一つになることから始めて、世界が一つになるために自分ができることはないかを考え、行動して行きたいです」、(2-7)「平田さんの祖父のあつゆきさんが語っていたように、『大人は理由が分かる内に死んでいったが、子どもたちは理由もわからないまま死んでいった』とありましたが、自分の意志ではなく、国が、大人が始めた戦争で関係ないはずだった人や子どもまでも命を奪った戦争というのは繰り返してはいけない過ちであると痛感しました」、(2-17)「『平和』や『戦争反対』といった一言で表せない感情を抱いた。戦争の加害・被害を4年間で様々見てきて、私は社会科教育に携わっていく中で、『平和』をどうとらえていくべきか、自分なりの答えを出さなければならぬと思った」等の感想である。これもまた、当然のことながら例年多くみられる感想である。

また最後に、同じく全17件中5件<sup>28</sup>(29.4%)で、残された人達の悲しみ、祖父が「笑わなくなった」のではなく「笑えなくなった」との話が印象に残ったとの感想である。例えば、(2-1)「祖父は厳格な人で、ほとんど笑うことがない学校の先生であったとのことでしたが、『笑わなくなった』のではなく、『笑えなくなった』のではないかという言葉も印象に残りました。やはり、笑わなくなったのは、当時の戦争の様子や悲惨さが影響しているのだと考えました」、(2-5)「生き残ったあつゆきさんが、笑わなくなった、ということを知り、原爆で亡くなったかはもちろん、生き残った方も長い間苦しみを続けてきたことから、原爆の被害は一時的なものではなく、今も続いていることを改めて思い知った」、(2-11)「原爆は落ちた時だけでなく、生き残った人も苦しみを続けたということを実際の句で見て、考えることがたくさんありました」等の感想である。平田氏の「語り」の場合、原爆で妻と4人の子どもの内3人を亡くした祖父の話であった。原爆投下そのものの悲惨さ、無残さというより、むしろ残されたものの悲しみが中心的内容であったので、それが聴講者の感想にも表れているのである。

#### (4) 小括

以上、本年度に実施した、広島市「被爆体験伝承者」山岡美知子氏の講話、そして長崎市「家族証言者」平田

周氏の講話を取り上げた。それぞれの「語り」について、文字起こしによりプロット毎の「語り」の時間、文字数からの量的分析、また聴講者からのアンケート結果(自由記述)からの質的分析により検討してきた。小括として、以下の3点を指摘したい。

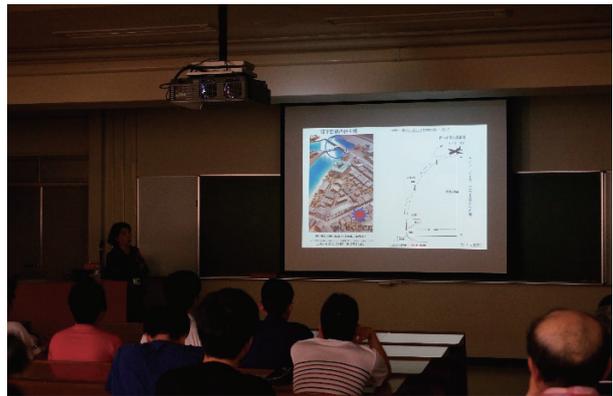
まず、広島市「被爆体験伝承者」講話と長崎市「家族証言者」講話の「型」の違いについてである。前述した様に、広島の場合は、やはり被爆体験の「語り」が中心であり、その方法は伝承者によって量的質的違いはあるものの、基本的にはパワーポイントを使った「語り」で構成されていた。一方の長崎の場合は、被爆体験の「語り」の部分が紙芝居であったり、今回の日記、俳句、さらにマンガを複合させた朗読であったりと多様である。何故、それぞれにこのような違いがあるのだろうか。その理由は、それぞれの養成課程の違いと最終的なまとめの違いであろう。広島市「被爆体験伝承者」養成事業の場合、前述した様に応募者を3年間かけて養成している<sup>29</sup>。初年度のほとんどは実際の被爆体験者の体験談を聞き、次年度はどの証言を継承するのかのマッチングと交流、そして最終年度で「語り」の演習・実習に取り組んでいる。また、注目すべきは最終的なまとめである。広島市「被爆体験伝承者」の場合、3年かけた養成期間の内、2年目には1万字程度の証言のまとめを作成する事になっている<sup>30</sup>。そして、それは二重のチェックを経て承認される。すなわち、元となる証言者と養成担当の広島市市民局国際平和推進部平和推進課によるチェックである。無事養成期間を経て、いわば公式に認定された「被爆体験伝承者」達は、基本的にはこのまとめに基づき、その後の講話を実施する事になっている<sup>31</sup>。一方の長崎市の場合、統一的なまとめの形式はない。例えば、先述した佐藤直子氏は紙芝居とパワーポイントの組み合わせであり、「家族証言者」としては最も年齢が若い三根礼華氏(登録時26歳)は、自身の祖母の証言ビデオとパワーポイントの組み合わせである。さらに、こうしたまとめに対するチェックはなく、養成主体である長崎市はやはり支援に徹しているのである。「証言者」がパワーポイントを使用したいのであればその作成を支援し、証言ビデオを活用したいとなれば、その撮影を補助している。広島の場合は、まさに伝承者の「養成」であり、長崎の場合は講話者の主体性を活かした「支援」をしているのである。広島と長崎の講話の「型」の違いは、こうした養成課程の違いと最終的なまとめの違いであろう。

次に、これと関連して多様な視聴覚資料を活用した「語り」について取り上げたい。今回の講話では、山岡氏は162枚、平田氏は49枚<sup>32</sup>のパワーポイントを使用していた。例えば、戦争・戦場体験者が刻一刻と減少している今日、「ヒト」ではなく「モノ」による継承として戦

争遺跡や遺物が注目されている。そうした戦争遺跡や遺物は、現場であり実物であるが故に、今日に生きる我々に臨場感と説得力を持たせている。しかし、そうした戦争遺跡や遺物がただ我々に示されるだけではなく、その由来や背景が同時に語られる事も重要である。すなわち、「ヒト」の「語り」と「モノ」の実物性との複合的活用である。初めて広島市「被爆体験伝承者」をお呼びしたのは、2015（平成27）年の高岡昌裕氏であった。当時は、やはり「語り」の継承であるから、視聴覚資料は極力抑え、被爆体験の「語り」を中心に講話を実施していた。しかし、次の榎原泰一氏からは、パワーポイントにより多数の視聴覚資料を活用し、「語り」と複合して講話を実施してきた。今後、ご本人の体験による「語り」が失われていく中で、より臨場感やリアリティのある「語り」を実施するには、こうした多様な資料を活用した「語り」の方法がますます必要とされるであろう。

また、最後に課題として再び「語り」の正当性の確保について取り上げたい<sup>33</sup>。先述した山岡氏の「語り」の構成の背景には、実は山岡氏の問題意識がある<sup>34</sup>。「被爆体験伝承者」の「語り」は、当然のことながら元の被爆体験の伝承が重要である。しかし、その伝承の基盤となる体験談そのものが信憑性に欠けていたらどうであろうか。誤解を恐れずに述べてみたい。被爆体験者が実際にその体験をしてから何十年もの月日が経ち、体験者自身は高齢化していくにつれ、その記憶のあいまいさは増し、認識はズレて正確性は失われていく。揺るぎないはずの被爆者の体験談が、当初伝承者が聞き伝えられたものと違ってきたらどうであろうか。伝承者は、体験者の体験を継承して去る事が使命である。しかし、その前提となる体験談の信憑性が疑われる事態となったら「語り」の継承は大きく揺らいでしまう。これは、オーラルヒストリーが持つ本質的な課題である。山岡氏が、全体の構成として、いわば説明的語りである「2. 原爆について」の部分がほぼ半分を占める構成となったのも、こうした問題意識によるものと考えられる。被爆体験の継承は、やはりその体験が必ず何らかの形で史実として検証され、実証性を確保してから実施する必要がある<sup>35</sup>。今後ますます重要となる課題である。

### <山岡美知子氏の講話>

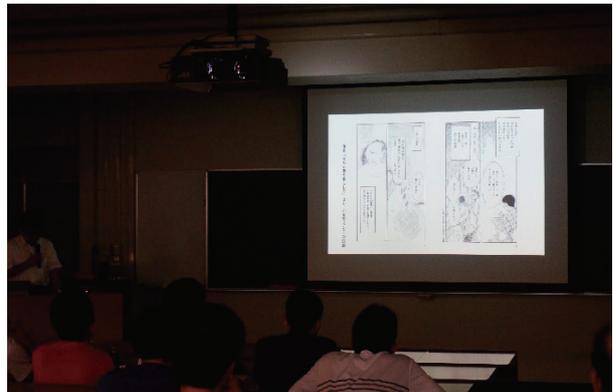


「2. 原爆について」の説明



「3」の母の被爆体験の説明

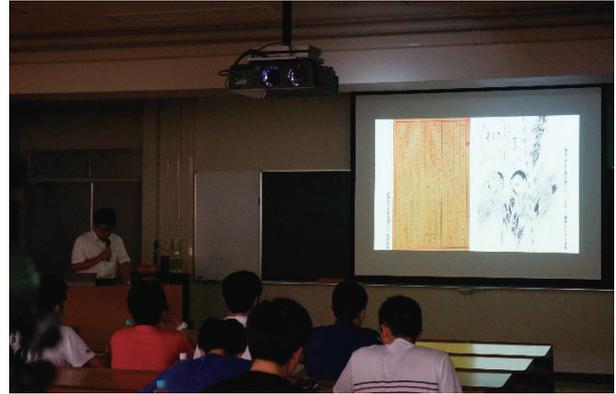
### <平田周氏の講話>



「2」の被爆時の漫画



「2」の日記の朗読



日記と漫画の複合的提示

- 1 2009-2011 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」(課題番号: 21530972)。その内容は、拙著『2012-2014 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 戦争体験「語り」の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用』(暁印刷, 2015年)としてまとめている。
- 2 2012-2014 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」(課題番号: 24531174)。その内容は、拙著『2012-2014 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 戦争体験「語り」の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用』(2015年, 暁印刷)としてまとめている。
- 3 2015-2017 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」(課題番号: 15K04475)。その内容は、拙著『2015-2017 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の構築』(2018年, 八郎湯印刷)としてまとめている。
- 4 2018-2022 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「地域における継承的アーカイブと学習材としての活用」(課題番号: 18K02606)。
- 5 「次世代の平和教育」については、前掲註3の報告書にまとめている。その特色として、以下3点を指摘した。
  - (1) 継承的アーカイブの活用
  - (2) 戦後の平和希求活動への着眼
  - (3) 目的の平和教育から方法的平和教育へ
- 6 広島市「被爆体験伝承者」養成プログラムに関しては、前掲註2報告書と前掲註3報告書参照。
- 7 広島市 HP「被爆体験伝承者募集」より。
- 8 長崎市「家族証言者」「交流証言者」養成については、前掲註3報告書参照。
- 9 長崎市教育委員会 HP (<http://www.city.nagasaki.lg.jp/kosodate/520000/523000/p001708.html>) より引用。2016(平成28)年5月27日閲覧
- 10 長崎市『「語り」継ぐ被爆体験(家族・交流証言)』推進事業実施要項』(2014年)「3 対象者の要件」による。
- 11 その詳細については、前掲註3報告書参照。
- 12 前掲註3報告書では、「被爆の実相」「被爆体験の『語り』」「平和への願い」の3点に整理していたが、これまでの「語り」の検討から新たに「原爆投下までの歴史的背景や生活の様子」

- を加え、4点とした。
- 13 前掲註3報告書参照。
  - 14 資料8の1, 3, 4, 10, 11, 15, 18, 22の8件である。
  - 15 一般聴講者の感想を除くと、実際に社会科教員を目指している学生の聴講者は19名で、実際に全体でのこの感想の比率は42.1%になる。
  - 16 資料8の1, 2, 4, 6, 17, 18, 19の7件である。
  - 17 ただし、写真単独ではなく、説明文があるものも含めた。
  - 18 「②現象的『語り』」は、体験者のおかれた状況下で何が起こったのかを現象として語るものである。前掲註2報告書, 83-84頁参照。
  - 19 資料8の, 5, 6, 7, 8, 9, 20の6件である。
  - 20 資料8の3, 5, 6, 8, 12, 19の6件である。
  - 21 資料8の3, 11, 12, 13の4件である。
  - 22 資料5参照。「○自己紹介, イントロダクション」における最後の部分である「1944年からアメリカの日本への本土空襲。日本はほんともう、戦争をするような力は残っていませんでした。じゃなぜ、原子爆弾は投下されたのか。それについて、考えてみてほしいと思います。」
 

日本の終戦の決意は、ソ連の参戦であったということを最近では言われています。原子爆弾の投下によって、戦争が終わったのではないってことです。これは歴史的に見て、皆さん大学生ですし、ご存知だと思いますけれども、ちょっと考えてみてください」といった聴講者への問い掛けである。
  - 23 資料6の質疑応答部分参照。「…よくよく考えて、よくよく調べてみれば、原爆投下は必要ではなかった。その当時は、さっき言ったように、空襲によってほとんどの市や町は破壊されていたのと、食糧もなくて、戦う軍備もなかった。それなのになぜしたのかっていうのが、ヤルタ会談からポツダム宣言から、歴史を、皆さん調べてみれば分かると思うんですけど、そういうのは必要ではなかったというのが、最近のアメリカの学生たちも段々分かっていますし、ヨーロッパからくる学生たちも、違うんだよって、最初指摘されたのは、日本人なのに知らないんだね、必要なかったんだよってのはありました。」
  - 24 資料8の1, 4, 11, 12, 14, 15, 19, 20, 21, 23の10件である。
  - 25 前掲註3報告書参照。全23件中14件(60.9%)で取り上げられた感想である。例えば、「紙芝居という媒体で被爆体験を聞いたのは初めてだったが、佐藤さんの語りのうまさや、映像の見易さもあり、心に残るものだった」、「方法論から見

た時に、紙しばいというのはとても効果的だなと感じた。お話だけでは想像できないその時の情景を見てとる事ができると共に、絵であるためにそこまでショッキングなものでなく、子どもたちが原爆についての思いを深められるなど考えた」等の感想があった。

<sup>26</sup> 資料8の2, 3, 8, 11, 12, 13, 21の7件である。

<sup>27</sup> 資料8の1, 7, 13, 17, 20の5件である。

<sup>28</sup> 資料8の1, 5, 7, 11, 15の5件である。

<sup>29</sup> 前掲註2報告書参照。

<sup>30</sup> 伝承者の話のスピードにもよるが、40～45分程度、遅くとも60分で講話が終了する事が目安になっている。そのため、その分の文字数を勘案して1万字程度となっていて、文字数の制約ではない。広島平和記念資料館啓発課西田満氏からの聞き取り(2016年9月14日)による。

<sup>31</sup> さらに、その後の実際の講話においても、運営を担当する広島平和記念資料館啓発課から折に触れて「語り」の正当性の確保のためのチェックを受けている。同上の聞き取りによる。

<sup>32</sup> その内訳は、多い順に文字25枚、写真14枚、マンガ7枚、グラフ1枚、家系図1枚、マンガと文字1枚であった。

<sup>33</sup> 前掲註3報告書、57-59頁参照。

<sup>34</sup> 2018(平成30)年7月26日に秋田大学で実施した「広島市『被爆体験伝承者』・『長崎市家族証言者』講話」時に秋田にお越しいただいた際の山岡美知子氏からの聞き取りによる。実際の講話時においても、特に質疑応答部分で、「語り」のベースとなる被爆体験の実証性について、例えば以下の様に応え

ている。「…だから、小学生に聞いた場合に、3,000度、4,000度、熱が出ました、みんなどう思うって聞いたら、人間、融けたと思う。融けた。じゃあ、資料館の写真を見てねとか、そういうことも言います。真実を伝える。話を作ってはいけない。話を大きくすれば大きくするほど、聞き手はすごいびっくりして、ああ、すごいと引き込まれるかもしれないけども、それではいけないと思うんですよね。正確に話をする。…中略(筆者)…私たちが、ただ被爆者から話を聞いてそのまま言っただけで、ちょっと違うんじゃないかねっていうことが、今まで何回もあったし。だから、取って、被爆者の話を、全部、この人が言うのは正しいと思わないときがあります。」(資料6の質疑応答部参照)

<sup>35</sup> 学生を中心とする聴講者にも印象に残った様で、こうした元の証言の信憑性に関する意見は、全22件中4件(資料10の1, 11, 12, 15)である。18.2%であった。例えば(1-11)「『同じ過ちを繰り返さない』ために自分には何ができるのか、自分は小学校教師を目指すので、このような戦争についての真実、“ありのまま”の話をして、伝えていきたいと思います」、(1-15)「『過ち』について戦争全てへの誓いの言葉であるということがとても心に響きました。この言葉には戦争について様々な角度で考えなければならないという意味が込められていると思います。このような考えを児童に持ってもらうために、教師の伝え方としては、真実をありのままに伝えることが大切だと思います。」

## 資料5

広島市「被爆体験伝承者」講和 山岡美知子氏 (2018.7.28) 文字起こし (60分5秒, 16,608文字)

## ○自己紹介, インTRODクシヨン (2分45秒, 494文字)

○山岡 皆さん, こんにちは。広島から参りました, 被爆2世の山岡美知子と申します。両親が被爆者です。今日はその話と, それから, 戦争とは何かということもちょっと考えてもらいたいなと思って, いろいろとパワーポイントを作っていました。

こういった言葉が聞いたことがあると思いますが, 過去を振り返らない者は同じ過ちを繰り返す運命にある。今までの歴史を見ると, いろんなところで戦争が行われました。そして, 今, この世界中のどこかでも, 同じ過ちを犯しています。その過ちを繰り返さないために, 広島のこと, そして長崎のことをもう一度思い出して, それから聞いて, 見て, 考えてほしいと思っています。

1944年からアメリカの日本への本土空襲。日本はほんともう, 戦争をするような力は残っていませんでした。じゃあなぜ, 原子爆弾は投下されたのか。それについて, 考えてみてほしいと思います。

日本の終戦の決意は, ソ連の参戦であったということを最近では言われています。原子爆弾の投下によって, 戦争が終わったのではないということ。これは歴史的に見て, 皆さん大学生ですし, ご存知だと思いますけれども, ちょっと考えてみてください。

## 1. 当時小学3年生の被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた子供たちの生活 (6分20秒, 1,201文字)

今日の講話の内容は, 当時小学校3年生の岡田恵美子さんから聞いた, その当時の子どもたちの生活, それから原爆について, 当時20歳の母が見た, 被爆した広島の様子。被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた, 原爆孤児のことについて, 核兵器について。じゃあ, 核兵器のない平和な世界を目指して私たちができることは, 一体何でしょうか。さっき言った岡田恵美子さん, この人です。当時小学校3年生の時でした。私の母は当時20歳で, 母の妹は中学1年生で原爆に遭い, その後亡くなりました。その話を伝えたいと思います。

これは被災した広島市の地図なんですが, 広島駅です。で, 爆心地。爆心地って聞いたことがあると思いますが, 原爆が炸裂した地面の位置のことを爆心地と言います。半径2キロの円の中。この円の中はほとんどの建物が壊れ, その後発生した火事で焼け野原になった地点です。私の母と, 母と妹は当時3.5キロ, この中に, ここで生活していました。母の妹は1.2キロの建物疎開作業で亡くなりました。母の両親は, この江田島っていうところに住んでいて, ですから生き伸びることはできました。

皆さんは平和公園, その前にごめんなさい。広島に原子爆弾が投下されたのは, いつでしょうか。これちょっと子どもじみた, 小学生たちにもこれをよく言ってるんですが, もう一度, 1945年の8月6日のことです。8時15分です。そして, 広島に落とされた原子爆弾は, リトルボーイ, ファットマン, エノラ・ゲイ, このうち何だと思えますか。知ってる人。はい。

○男 1。

○山岡 1のリトルボーイですね。はい。1のリトルボーイです。さっきのファットマンっていうのは, 長崎に落とされた原子爆弾です。エノラ・ゲイっていうのは, 広島に原子爆弾を落とした飛行機の名前です。

このリトルボーイ, なんと長さが3メートルで, 重さが4トンもありました。

皆さんは平和資料館に来られたことがありますか。ある人, いますか。はい。この平和資料館, 実は今本館のほうが工事中で, この東館だけです。で, 来年度からは, 8月から両方ともオープンしますんで, ぜひ広島にお越しください。この資料館の中には, 中学1, 2年生が建物疎開で, その時着ていた制服が展示しています。よく見ると, ボロボロの制服なんですが, よく見ると小学生みたいなサイズです。

というのは, その頃は食べるものがないから, 小学校の運動場にまで食べるものを植えていたそうです。だから当時の岡田さんもそうですが, 当時の小学生たちは運動場は野菜を作るところだと思っていました。

また, 教育。この戦争は正しい戦争だと教えられていたそうです。正しい戦争ってあると思えますか。ないですよ。はい。皆さんご存知のように, 神風特攻隊。爆弾を積んだ飛行機に乗って, 相手の船に突っ込んでいく。そういった誤った国の政策で, 若い命が失われました。更に, 原爆や空襲で罪もない市民や子どもたちが, 犠牲になったわけです。

## 2. 原爆について (28分18秒, 8,105文字)

次に、原爆について、少しお話ししたいと思います。太平洋戦争中、アメリカは原爆を投下、原爆を開発していました。アメリカとイギリスが原爆の開発が成功したら、日本に落とすことを10日前、1年前に決めました。

そして、このエノラ・ゲイっていうのは、原爆を投下した飛行機の名前なんですが、この乗組員たちも、実はこのユタ州で原爆投下の練習をしました。自分たちも、安全に帰りたいですね。だから、1年前から練習したんです。

どういうふう練習をしたかという、水平に飛んできて爆弾を落として、155度急旋回したら、この衝撃波から逃れることができる。そういう練習を1年前からしました。

1945年、三つの原子爆弾ができあがりました。一つは、ウランを原料とした広島型。もう二つはプルトニウムを原料とした長崎型。この長崎型は構造が複雑であったために、これが実際に爆発するかどうか、世界で初めて原子爆弾を爆発させる実験をアメリカのアラモゴドっていうところでしました。成功しました。これを見た科学者の人たちは、地球に太陽が落ちてきたようだ。こんなものを使ってはいけないと反対する人もいたそうですが、アメリカはせっかく作った原子爆弾がどのような影響があるか知りたいために、広島と長崎が犠牲になったわけです。

そして7月16日成功しましたという知らせを受けて、なんとアメリカのインディアナポリス号が二つの原子爆弾を積んで、このサンフランシスコからテニアン島へ向かいました。

このテニアン島は、近くにグアム島があります。今度はそこから、広島と長崎に飛行機で今度は原爆を運び、落とされたわけです。なんと、ユタ州で練習していたのが、日本の上空でも練習を始めたんです。

原爆投下前、2週間前から、日本の上空で練習しました。このパンプキン爆弾っていう爆弾は、長崎と同じ形、同じ重さ、でも中身は普通の爆弾で、49回も練習したわけです。長崎、小倉、広島、新潟には練習していません。これは原爆投下目標都市として、決められていたからです。じゃあなぜ、日本の上空で練習しなければならなかったのか。

水平に落とすことは、命中度が広がることです。急降下して落とすと命中度は狭まるけれども、この爆風で飛行機は壊れる。だからちゃんと、パンプキン爆弾を落とす飛行機、そしてあと写真撮影機がついてきて、どこに落としたら、どのくらいの距離になるのか、ちゃんと調べたそうです。だから、原爆投下目標都市、目標の相生橋から、たった300メートルしか離れていなかったそうです。

その時日本は、なぜ太刀打ちできなかったのか。というのは、B29爆撃機っていうのはあまりにも高いところに飛んでいたために、日本軍は太刀打ちできなかったそうです。

またその時主な都市に限らず、東京、大阪、地方の都市までもが焼夷弾という火災を発生させる爆弾で街が焼けていました。

皆さんご存知のように、東京大空襲、ご存知ですよ、さっきお話が出ました。3月10日、10万人の方が亡くなりました。これは歴史的に見て、こんなにたくさん、一晩で亡くなったのは世界中でないそうです。この映像を見てください。人間がこのように、丸焦げになっています。

でも、広島にはそういった焼夷弾が落とされませんでした。そのため、広島市は何をしたかという、建物疎開作業っていうのをしました。建物疎開作業とは、あらかじめ建物を壊して空き地を作り、そして火災が燃え広がらないようにすることです。この作業を、中学1、2年生の生徒たちが手伝っていました。その時着ていた制服、弁当箱が資料館に展示しています。岡田さんはよく、これは本物ですよ、レプリカではありません。だから、しっかり見て帰ってくださいっていうことを、いつもおっしゃいます。

実はこの写真、1945年7月25日、アメリカが撮った写真です。アメリカはたびたび広島市内に飛んできて、爆弾を落とさず、何をしたかといって、広島市内の写真を撮りました。そしてどこに原子爆弾を落としたいかを決めました。相生橋。この相生橋は、広島市の中心にある。だからここを目標にしました。またこの白い線、くっきりした白い線は何かというと、建物疎開でできた空き地です。広島には、川がこうやって七つあります。東西に空き地を作ることによって、もしここで火災が発生しても、この空き地と川で燃え広がらない。そのために作業をされたのが、建物疎開作業です。

この相生橋。広島市の中心にあると同時に、ユニークな形をしていました。Tの形をしている相生橋。飛行機から見て、分かりやすいですよ。だから、ここが目標になったわけです。さっきの白いくっきりした線は、建物疎開でできた空き地です。

今、この三角になっているところが、今の平和公園になっています。実はこの空き地、今は平和大通りとして活用されています。そのため、多くの建物疎開で亡くなった学生たちのために、いろんな所に碑が建てられています。

じゃあ次に、原爆投下までの過程を、ちょっとお話ししたいと思います。

最初、投下目標地は、17 地域を選びました。そして、7 月 25 日は最終的に長崎、小倉、広島、新潟が、四つの地域が選ばれました。8 月 6 日、第一目標は広島ということが決まりました。

なぜ広島に原子爆弾が落とされたのか。爆弾を落とす場所の条件がありました。直径 4.8 キロ以上の平らな市街地を持つ都市。何のためかという、人や建物に爆風や熱線を効果的に与え、爆風の威力を正確に測るためです。

これ広島の地図なんですけど、こうやって見ると、広島はデルタの地帯に、周りに山がある。ここが瀬戸内海です。4.8 キロ以上の都市、ちょうど入ったわけです。だから、広島がまず選ばれます。

そして、人口密集地であること。当時、約 35 万人の人が住んでいたと言われています。また、連合軍の捕虜収容所がないと思われていたんですが、実際には 12 名のアメリカ兵がいて、彼らも原爆の犠牲になりました。

実はこのカートライトさん。この人が生き延びています。というのは、8 月 6 日、このカートライトさん、なんと東京で尋問されていたんです。というのは、広島みたいな結構大きな都市なのに、空襲がない。日本軍はおかしいと思いますよね。だから、東京に呼んで尋問をしていたために、助かりました。彼は 1999 年広島に来て、広島の人々の痛みは私の痛みですってという言葉を残しています。

次に、広島に原子爆弾投下した B29 爆撃機の名前、エノラ・ゲイ。実はティベッツ機長さんのお母さんの名前だったそうです。

お母さんの名前を自分でエノラ・ゲイって書いたそうです。彼は原爆を投下してテニアン島に帰り、勲章をもらったために、お母さんは死ぬまで喜んだそうです。

次に、8 月 6 日、もう一度テニアン島から広島に行きます。実は 3 日後。本当は小倉に行ったんです。小倉に行ったんだけど曇ってました。急ぎよ、長崎に行きました。で、実は小倉から長崎に行く途中、三つの燃料タンクのうち一つ不具合が見つかったんです。だから、急いで長崎に行き、そして雲の切れ目に落とすために、実は被害は中心部から離れていたために、被害は広島の方が大きかったといわれています。そして、長崎から帰る途中に、沖縄で一応給油しています。燃料タンクがもうないということで、給油をしてテニアン島に帰りました。沖縄は既にアメリカの占領下にありました。

次に、8 月 6 日、もう一度お話ししたいと思います。7 時 9 分、空襲の警報が鳴りました。B29 爆撃機 1 機が、広島の上を通り過ぎました。何も起こりませんでした。この飛行機、何をしたかという、天気を調べるものだったそうです。広島の上は晴天。これで、広島の上は決まりました。7 時 31 分。空襲の警報は解除され、人々は防空壕から出て、私の母の妹も行ってきますと言って、建物疎開作業に行きました。

既に 3 機、エノラ・ゲイ号、科学観測機、写真撮影機が広島に向かっていました。エノラ・ゲイというのは、さっき言ったように原爆投下した飛行機の名前。科学観測機は、パラシュートで観測機を落としました。被爆者の多くの人たちは、このパラシュートをよく見えています。パラシュートが落ちてきた。ピカッと光ったので、原爆はパラシュートで落ちたと勘違いしてる人が多いですが、実は観測機だったんです。

この観測機、爆心地から 17 キロ北に落ちたために、実は資料館に展示されています。この観測機、実は原爆投下の前と後の温度や気圧などを調べたそうです。このデータは、この観測機に全て送られていたそうです。

次に、この T の形をしている相生橋。飛行機から見て分かりやすい。だからここが目標になりましたが、実際に落ちたところは、爆発したところは、相生橋の中心から 300 メートル離れた島病院上空でした。このエノラ・ゲイ号は、目標地から 4 キロ東から、9,600 メートルの高さから爆弾を落とすだけです。慣性の法則で習われたと思うんですが、慣性の法則に従って、600 メートル上空で、これは爆発させたんです。一番下に落ちる、穴が開くだけ。あまり高いと爆風の威力が分からない。

600 メートルはちゃんと調べた高さだったということは、アメリカの公文書館でちゃんと書いています。調べた高さだったんです。

この高さを測るのに何が使われたかという、ここにアンテナが付いています。これ広島の上の原子爆弾、長崎にも原子爆弾にアンテナが付いています。このアンテナ、八木アンテナ。1932 年、アメリカで八木博士はアンテナの特許を取ったために、皮肉にも日本の技術が原爆投下に使われたわけです。原爆を投下して、600 メートル上空でこれは爆発しました。今、このアンテナは皆さんご存知のように TV アンテナとして世界中で使われています。

よく原爆は目視、目で見て落とすと言われますが、実はこのノルデン照準器を使いました。ノルデン照準器に、ここに望遠鏡があります。

照準を相生橋に合わせて原爆を落とします。ということは、もしここ曇ってたら照準に合わすことできませんよね。だから、晴天というのは重要なポイントになります。今資料館では 3D プロジェクションがあって、こういっ

たふうに八木アンテナ、落ちる時にこのアンテナを見ることができます。3D プロジェクションっていうのは今ありますので、もし資料館に来られた時は必ず見てください。

で、よく300メートルの誤差、ではありません。あまりにも高いところから飛んで落とすだけだから、正確っていうほど正確だと思います。というのは、パンプキン爆弾を使って何回も練習したためだと思います。そして、1秒後に直径400メートルの火の玉ができます。

この火の玉からまず放射線が出ます。そして熱線。その後、爆風が出ます。

この爆風は、爆心地付近では440メートル、そして真空状になって空気が減ってくると、じゃあどんなことが起きたんでしょうか。

こういうふうに目が飛び出る。気圧の変化によって目が飛び出ます。というのは、皆さん深海魚ご存知だと思うんですが、海の底から気圧の変化で目が飛び出る。そういう状態だったと言われています。

そして、この爆風で木造建築は壊れ、その後発生した火事で、この人たち生きてまま焼かれて亡くなったんです。

じゃあ、こういった絵を描いた人。お兄さん助けてって言っている絵なんです。でも、僕1人ではあなたを助けることは無理だから、他の人を呼んでくると言っておいてこの場を立ち去り、そして戻ってこなかったの。この人たちを見殺しにして、今自分が生きている。だから本当は描きたくないよね。でも悲惨なこの状況を皆さんに伝えないといけないうことで、思い出したくないことを思い出しながら描いた被爆者の絵を見た時、どういう思いで描いたか想像してみてください。

これは小学校の校舎が崩れた絵です。もう火が迫ってくる。この生徒たち生きてるんですよ。生きていながら、熱いよ、熱いよって、亡くなったそうです。こういった状況は、広島市内あちこちで見られたそうです。

だから今でも、自分の家族を置き去りにして、今自分が生きている。その人は、今もトラウマを持ち続けながら、死ぬまでこの子どもたちを助けなかった、そういうトラウマを持ち続けながら、生活している被爆者もたくさんいるということを忘れないでほしいと思います。

次に、現場から発生したエネルギーの内訳。爆風が50パーセント、熱線が35パーセント、15パーセントの放射線。この三つが複雑に作用して、被害は大きくなりました。

ちょっとここで、皆さんにちょっとくどいようなんですが、伝えておきたいのは熱線です。熱線が3,000度から4,000度。鉄の溶ける温度が1,500度。必ず皆さんそう、伝承者の人も必ず言います。1,500度。どんな温度だったのでしょうか、っていうことをよく言います。

でも、ピカッって光ったとこだけなんです、実際。例えば、ここに熱線が当たりますよね。当たったところが3,000度、4,000度。当たらない背中が3,000度、4,000度にはなりません。これ、皆さん勘違いしてる人が多いんです。さっき原爆ドームの写真が出ましたよね。原爆ドームの上の鉄、1,500度。鉄なんだけど、溶けてなかったですよ。

それと、こういったこちらから熱線が当たってるから、ここが大火傷してる。こっち大火傷してません。

また、これは資料館に展示している写真なんです、ここを見ていてください。

この人は腹巻をしていたから、火傷していません。もし3,000度、4,000度だったら全部火傷しますよね。火傷していません。ここ火傷していないですよ。熱線がこの腕で遮られたために、ここが火傷していません。また、この人実は黒いズボンを履いていたそうです。黒っていうのは、熱を吸収しやすいですよ。だから、火傷の仕方が違うっていうことを、もし資料館に来られた時、ちょっと違うんだなっていうことを見てください。3,000度から4,000度の熱。皆さん、空気全体が3,000度、4,000度と勘違いされているんですが、熱線。熱線ですから、熱ではありませんね。線が当たったところが3,000度、4,000度。当たらない背中が、なっていません。3,000度、4,000度の意味、お分かりになりましたでしょうか。いいですか。

次に爆風。爆心地から100メートルの時点では、280メートルのすごい風が吹いたそうです。考えられませんですよ。

台風のことを思うと、3.2キロで28メートル、爆心地から4キロのところでも25メートル。この爆風はものすごい勢いで襲ってきますから、半径2キロのところまで達するのに約10秒間。

直径4キロのところでは、約10秒間で家が崩れたそうです。

また爆風によって、こういったコンクリートの建物が壊れたり、電車がこのように脱線しています。

原子爆弾の被害で、目に見えない原子爆弾の恐ろしさは、皆さんご存知のように放射線です。この放射線、実は核分裂が始まると同時に、もう放射線出てます。放射線出てる。

この放射線、もう既に家の中にも入ります。

この家の中、木造建築のだいたい59パーセントの放射線が出ていたそうです。

そして、この放射線には、初期放射線と残留放射線っていうのがあります。1分以内に放射された放射線を初期放射線、この放射線に当たった人、実は、火傷もしていない、ケガもしていない。でも、この放射線に当たった人、急に亡くなったり、病気になったそうです。そして、市内にはこういった残留放射線が残っていました。そんなこととも知らず、たくさんの人たちが家族や友達を探しに市内に入り、この残留放射線で、今も苦しめられています。

この残留放射線の中で、黒い雨っていうのは皆さんご存知だと思いますが、黒い雨もこのように広範囲にわたって降り、放射線の影響を受けたといわれています。

そして、後障害としては、白血病がだいたい10年後にすごく多く現れたそうです。そして、その後何かいろんな甲状腺、食道がん、いろんながんが、今もたくさんの人が苦しめられているといわれています。

じゃあ、この放射線はどういうふうになるのかというと、体内の奥深くまで入り、細胞の中の染色体を切断するわけです。切断された染色体は、このように違った染色体同士が結合するために、がんが引き起こされるといわれています。

放射線による障害は、まず最初に急性障害と後障害があります。

この急性障害で紫の斑点が出た。私の母もたくさん紫の斑点が出たと言っていました。後障害としては白血病。白血病で思い出すことが、佐々木禎子ちゃんのお話があると思います。また、差別。実は、なかなか放射線によって倦怠感で、仕事もうまく長続きをしない。で、就職に、すごく就職できないという人がたくさんいたんだそうです。これは私たちは、よくその当時、ぶらぶら病と言っていたそうです。また結婚。被爆者の人と結婚したら、奇形児が生まれるかもしれない。そういうことでかなり差別があったそうです。で、この紫の斑点の絵をちょっと見て、こういうふうに紫の斑点が体中に出てくるということです。

で、こういった大火傷をしてケロイド状態になる。なかなか結婚が難しかったといわれています。ちょっと話が、いろいろ映像が出てくるんですが、紫の斑点とか、いろんなところから大出血をしたといわれています。

半径2キロの円の中。この半径2キロの円の中が、ほとんどの建物は壊れ、その後発生した火事で焼け野原になったというのは、360度のパノラマ写真を見て皆さんちょっと考えてください。たった1発の原子爆弾たった1発ですよ。たった1発の原子爆弾で、このように街が破壊された。ここが瀬戸内海、因島。ここが宮島です。たった原子爆弾で、街が破壊されたというのを見てください。さっき相生橋が映っていたんですが、相生橋は壊れませんでした。

原爆を落とされた時の人口が、約35万人。1945年の8月6日から12月31日まで亡くなった人が、約14万人の方が亡くなったといわれています。

被爆前の広島市の市内の写真を、ちょっと見ていただきたいと思います。

これは相生橋と原爆ドーム。今は原爆ドーム、まだ産業奨励館の写真を見てもらいたいと思います。

このきのこ雲の下で、8月6日どんなことが起こったのか。

これはアメリカがちゃんと原爆前と後の写真も、比べるための写真もちゃんと撮っているんです。ここが爆心、この四角いのは実は広島城の跡です。さっき言った、ここがドームですが、ここが爆心地です。

これ宮島なんです、宮島までずーっと見える。そこまで破壊されたっていうことです。

この被爆電車っていうのがあります。651号。

実は、今も走っています。これに乗ることもできますので、もし乗りたいなと思ったらまた広島電鉄のほうに言っただけであれば、貸し切りもできるそうです。

実はこの写真、広島駅から瀬戸内海を見た時の写真です。似島っていうのが見えます。ほとんどの建物が壊れ、その後発生した火事で焼け野原になったところです。

この相生橋とこの本川小学校。これはすごい強いコンクリートの建物ですから、残りました。橋は壊れませんでした。というのは、橋っていうのは上からの力は強いんですね。例えば、電車が通ったりバスが通りますので、上からの力は強い。爆風は上から来たので、橋は壊れませんでした。もし津波みたいに横から爆風が来たら、橋は壊れていたかもしれません。

で、ここに爆心地があります。広島に来られて、爆心地行かれたことありますか。ある人。はい。

爆心地、これ原爆ドームですが、爆心地まで300メートル離れたところなんですが、小さなこういったモニュメントが立ってます。島病院のところ、モニュメントが立っています。

で、この写真と、この写真一緒なんです。この上600メートル上空で爆発しました、させたわけです。はい、ここに鳥居が残っています。実は爆風が上から来るためにこの鳥居は残りました。もし横から爆風が来たら、この鳥居は

壊れていたかもしれないが、この鳥居は生き延びて、今広島城のほうに移築されています。実はこの爆心地、島病院という病院がありました。この玄関と窓枠が、ここにちゃんと残ってますよね。この上、600メートル上空で爆発しました。

### 3. 当時 20 歳の母が見た被爆した広島の様子（10 分 8 秒，2,901 文字）

次に、ちょっとこの説明をすると長くなるので、次に、私の母の被爆体験を伝えたいと、言いたいと思います。母は 20 歳、母の妹は中学 1 年生でした。

妹はこの建物疎開作業に 8 月 6 日、3.5 キロのところからいってきますと言って、1.2 キロの建物疎開へ行きました。母はこの 3.5 キロの円の中にいました。

原爆がピカッと落ちた時、ものすごい光だったそうです。

気がついて、ものすごい光で、爆風で、家の中にも吹き飛ばされたそうです。

気がついて外へ出てみると、中心部は真っ黒い煙で覆われ、至る所で火災が発生していました。中心部からたくさん人が逃げてきたそうです。

皮膚も肉も全部ぶら下がって、それでも助けてと言って逃げてきたそうです。

でも、母が見たこの人たちは、すすで真っ黒かった。ぼろの布が垂れ下がってるのかなと思ったら、皮膚だったそうです。20 歳の母にとっては、とっても怖かったと言っています。

さっきお見せした、この被爆人形。実は、これは資料館の本館に展示していましたが、もう撤去されました。もう見ることはできません。でも母が言うには、顔はきれいです、服も着ている。こんなものではなかったと言っています。顔だってこんなきれいではない。服だってほとんど着ていなかったと、母はいつも言っていました。

8 月 6 日の夜は、市内は赤々と燃えたそうです。帰ってこない妹を、探しに行くことはできませんでした。

母は今でも、真っ赤になった夕焼けを見るたびに、この原爆のことを思い出します。母だけではありません。

多くの被爆者の人たちが、ふとした時、あの場面、あの状況を思い出します。だから今でも原爆ドームを見たくない、平和公園に行きたくないって言う被爆者がいます。

次の日になると火災はほとんど収まりました。いくつかのコンクリートの建物は残りました。その中へ母は妹を探しに来ました。でもこの中、死体でいっぱいだったそうです。足が前に行かなかった。でもみんな必死になって探していたから、素手で真っ黒い死体を 1 人ずつ起こしては妹を探して歩いたそうです。

たくさんの人たちが、家族や友達を必死になって探していたそうです。全部死体なんですよ。最初は怖かった。でも人間って不思議ですよ。全部死体だからもう慣れて、もう頭が変になったと母は言っていました。

たくさんの人たちが、水を求めて亡くなっていました。当時水をやっちゃいけないぞ、水をやったらすぐ死ぬぞと言われていたそうです。母も妹を探していると、まだ生きてる人が、この防火水槽、多分大学生ちょっと知らないと思うんですが、この防火水槽っていうのは、戦争中ここに水を溜め込んで、もし火災が発生したら、この水で火を消す、そういった防火水槽でたくさんの方が亡くなっていたそうです。母も妹を探していると、まだ生きてる人がいて、水、水と言って、じっと見つめる姿は、今でも忘れられないと言います。母は水をあげなかったそうです。どうすることも、何もできなかった。母はこの話になると、いつも涙を流します。また、たくさんの人たちが、火災から逃れるために川へ行きます。

広島川は海に近いので、実は死体が行ったり来たりしていたそうです。特に、この横川橋っていうところは、死体がこのように行ったり来たりするので、橋のたもとにはこれ全部死体なんです。

死体が山のように浮いてたそうです。また、いろんなところで救護所ができます。その中へ妹がいるかどうか、探して歩いたそうです。

なんとこの傷口に蛆虫、分かりますかね。小学生にいうと、最近蛆虫って分からないんですよ。だからちょっと、蛆虫っていうのは蠅が卵産んで幼虫になる、蛆虫がいっぱいわいていたそうです。

じゃあ、この煙は何でしょう。実はあまりにもたくさんの方が亡くなるので、このように臨時的火葬場ができたんです。人を山積みのようにして燃やすんです。臭い、どうだったと思いますかね。1 人、2 人ではありません。またいろんなところで臨時的火葬場ができたために、市内には表現できないような臭いだったと言っていました。でも、これもだんだん、臭いも分からなくなったと母は言っています。

この人たちは身元が分かりません。身元が分からない遺骨は、平和公園の中にある原爆供養塔の中に収められています。このドアを開けると、中は身元不明の遺骨が 7 万人、身元が判明しても引き取り手のない遺骨が 814 人、実は

去年1人ほど見つかりまして、814人になったんですが、1人見つかったんです。そして自分の墓に、納められたそうです。

このドア開けると、中はきれいに整頓されています。ちゃんと亡くなった遺骨が、名前を書いて、これは814人の遺骨が、このように中には並べられて、納められているそうです。

なんと2004年、つい最近ですよ。84遺骨、この似島っていうところで見つかりました。実は爆心地はここなんです。当時たくさんの人たちが似島へ連れてこられました。似島には戦争中、箕島検疫所っていうのがあって、病院、お医者さん、薬がたくさんあったため、多数の人たちがここへ連れてこられました。実は私の母の妹も、似島にいるということで、母は行ったそうです。

この病院の中、板の間にたくさんの人たちが並べられていて、この中はうめき声でいっぱいだったそうです。お母ちゃん助けてって。私の母の妹の名前は敦子っていうんです。

敦子、敦子、と叫んだら、どこかで姉ちゃんって聞こえたそうです。そこへ行ってみると、妹の顔は腫れあがって、焼けて分からなかった。本当に敦子って聞いたら、姉ちゃんっていったので、家に連れて帰りましたが、2日後に亡くなったそうです。8月10日のことだったそうです。

母の妹は、家の空き地に穴を掘って火葬したがために、ちゃんと遺骨をお墓に納めることができました。親戚の人たちは、あんたところはいいいね、うちのお墓には原爆で亡くなり、そして遺骨が見つからないので、8月6日原爆って書いてるよって言います。このように、広島のお墓には原爆で亡くなり、そして遺骨が見つからないので、遺骨の入っていないお墓がたくさんあります。いまだに、どこでどのように亡くなったのか、分かりません。よく広島はきれいに復興されたねと言われますが、どこかで遺骨が眠っているかもしれません。まだまだ犠牲になった方の思いが残る広島だと、私は思います。

実は平和公園は、これ平和公園の地層の断面図なんです。この黒いところが原爆にあったところです。平和公園は1メートルぐらい盛り土をして、平和公園は作られました。そのため、大きな遺骨は、これ掘り起こしてるの、分かりますよね。掘り起こされて供養塔の中に納められましたが、小さな遺骨は、この平和公園の下に眠っていると私は思います。というのは、私の母から聞いた話なんです。真っ黒い木の根っこかなと思ったら、手首だった。真っ黒い根っこがあるかなと思ったら、足だった。半分骨で、半分肉だった。あなたに100回も200回も言っても、絶対想像できない、理解できない。そのような光景だったと、母がいつも言っていました。そういう意味で、私は平和公園は大きな大きなお墓だと思っています。

#### 4. 被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた原爆孤児の事 (3分46秒, 1,016文字)

次に、岡田さんから聞いた、集団疎開についてお話したいと思います。小学校3年生から6年生の子どもたちは、広島から疎開して田舎に集団疎開をしました。その子どもたちは助かりました。

でも、こういった集団生活をするんですが、田舎に行っても決して楽しいことはなかったそうです。

早く家に帰りたい、帰りたいと思う子どもたちがいきましたが、じっと我慢して田舎で生活していたそうです。この子どもたちは助かりましたが、でも市内に残ったお母さん、お父さん、そして家も、そして大事にしていたもの全て失いました。かろうじて生き延びた親たちは、疎開先へ子どもを迎えに行きました。でも、待っても待っても迎えに来ない子どもたちもいました。その子どもたちは、先生と一緒に市内へ戻ってきました。今日はお母ちゃんと一緒にご飯を食べる、今日はお母ちゃんと一緒に寝ると、お母さんに会えるのを楽しみにしながら戻ってきた子どもたち。広島市内を見てびっくりしたそうです。

一人ぼっちになりました。その子どもたちは、施設に預けられました。施設になじめず、そこから飛び出した子どもたち。

広島駅の周りにたくさんいたそうです。みんな、お腹を空かしていたそうです。人がものを食べている時ですよ。人の口の中に手を突っ込んでものを食べた、取って食べたんですよ。できますか、できないでしょ。生きるために人を傷つけ、生きるために物を奪った、草も食べた、蛙も食べた、食べれるもの全て食べた。でも、お腹空かしすぎて、亡くなる子どもたちもいました。その子どもたちの口の中、何があったと思いますか。小っちゃな石ころ、石ころを、なめながら亡くなっていたそうです。またこうして、靴磨きをする子どもたちもいたそうです。じゃあ、この道具を与えた人、誰だったと思いますか。実は、やくざがこの道具を与え、稼いだお金は持って帰る。でも、食べるもの着るもの、そして寝るところは与えられたそうです。でも、この子どもたちが大きくなると、やくざのけんかの一番前に出さされるんです。せっかく生き延びた子どもたちが、やくざのけんかのために亡くなる、そういった子どもたち

がたくさんいます。でも皆さん、ちょっとここで考えてもらいたいのは、世界中の今どこかでは、そういった子どもたちが今も亡くなってますよね。今も犠牲になってますよね。そういう子どもたちがこの世界中には今もいるということを考えて、戦争とは何かということも考えてほしいと思います。

### 5. 核兵器について（3分39秒，987文字）

次に、核兵器は今もたくさん存在するっていうことで、実はアメリカが核兵器を作りました。そしてソビエトも作りました。一つじゃいけない、二つ、三つと、たくさんの核兵器が広島、長崎の原爆投下後に作られたわけです。1988年約7万発の核弾頭が作りました。でも、作っただけではないですよ。

いろんなところで核実験が行われました。世界中でいろんなところで核実験が行われたわけです。

例えば、ネバタっていうとこと、ビキニ環礁、もう一つ、ここですね。写真を見てもらいたいと思います。

このネバタ、実はアメリカの兵士に核実験を見させて、90秒後に突っ込めって、突っ込ましたんですよ。この人たちも、放射線の影響を受けています。

また、ビキニ環礁、皆さんご存知だと思いますが、1954年ビキニ環礁、じゃ、この下に住んでいる人たちも被爆者です。被爆者ってというのは、広島と長崎だけではありません。いろんなところで核実験が行われて、その下に住んでいる人たちも実は被爆者なんです。

これは南太平洋、フランスで行った核実験です。

世界の核兵器は1986年、約7万発もありましたが、今は、実は1万5,000発の核弾頭があります。一番怖いのは、この実戦配備されてるのが4,000発もあるっていうことですよ。ボタン一つで飛んでいく。そういう小型の核弾頭がたくさんある、4,000発もあるんですよ。よく、だんだん少なくなってるからよかったね、じゃ済まされないんですよ。昔作った大きな核弾頭は小型化して、大きいのは使えないんです。

だから小型化してるから、だんだん少なくなっていますが、こういったふうに命中精度はたった30メートル、ボタン一つで飛んでいくっていう、核弾頭に代わりつつあります。

また、この核弾頭は戦争で使えなくても、いろんなところで事故が起きています。例えば1961年。2個の水素爆弾が落下し爆発寸前だったということが、5年前に分かりました。隠されているんです。世界中で、いろんなところで、700件も事故が起きています。これをアメリカの学生に言ったら、ほとんど知っています。知ってるんです。皆さん、よくいろんなところで事故が起きてるってというのが、皆さん知っていました。

また、去年ですかね、9月10日NHKスペシャルで沖縄と核っていうの、放映見られた人いますからね。なんと、沖縄返還前1,300も、核弾頭が配備されていたんですよ。そのうち一つ事故があって、アメリカ兵が亡くなっています。

### 6. 核兵器のない平和な世界を目指して（7分6秒，1,904文字）

次に、この広島の原爆死没者慰霊碑、ここの中に安らかに眠ってください、過ちは繰り返しませぬから、という言葉が刻まれています。よくこの過ちとか、ペンを塗られた事、5回もありました。なぜこんなことをするだろうか。実は、この過ちってというのは、アメリカが過ちをしたのではないのかっていうことで、ペンを塗る人がいますが、この過ちってというのはどういうことなのかというと、戦争という過ち全てを表します。

日本が中国に行って戦争しましたよね。それも過ち、今どこかで戦争、争いが起こっている。それも過ち、全てを表します。この説明文の中に、憎しみを乗り越えてという言葉があります。私は、憎しみから決して平和は生まれてこないと思います。

次に、核兵器のない平和を目指して、戦争の責任はということ、何よりも戦争で子どもの未来を奪います。じゃあ、その責任、被害の責任は国が負うんじゃないですよ。私たち国民が、負わされる。戦争と核兵器は人の手で初めて作られたんだから、人の手でなくさなければならぬと私は思っています。

核兵器を出さなければ人類も地球に生き残れない。核兵器とはどんなものかっていうのを、ちょっと読んでみていただきたいと思います。ちょっと時間がないので、ささっとします。いろんな戦争で使わなくても、事故でも被害は計り知れない。核兵器の恐ろしさは隠されてきた。そして語られていない。だから核兵器をたくさん作っている。

じゃあ、核兵器をなくすにはどうしたらいいのだろうかということ、核兵器禁止条約、今年、去年できましたよね。また、お互いに武器を持たない。決して武力ではなくて話し合いで解決する、なかなかできないことですよ、話し合いですっていうことが。この核兵器禁止条約、皆さんもう大学生ですからね、なぜ核兵器は増え続けたのか、核兵器禁止条約、じゃあ広島は何を伝えたらいいのか、なぜ核兵器が減らなかったというのをちょっと読んでみてもらっ

て、いろんな、NPTとかGTBTとか、こういうのがたくさんありました。これは核実験を禁止するっていうことなんですけど、抜け道がある。

例えばアメリカではこういった核実験をしています。Z machine といって、8グラムのプルトニウムを入れて、X線をあてて高圧になる。これ臨界前、核実験だからこの条約にはあてはまらない、こういう実験をしているということですよ。

核兵器禁止条約、いろんなのができて、今11ヶ国批准されています。批准されるっていうことは、国が承認されたということですよ。59ヶ国が署名、じゃあ、日本はどうでしたでしょうか。

日本は全然、出席もしなかったということですよ。日本と韓国は、会場に参加しなかった国は、日本と韓国なんです。唯一の被爆国である日本がまず先頭に立って、この核兵器禁止条約について、先頭に立たなければならない日本が参加しなかったということです。批准した国が、先月パラオが批准されたので、全部で11ヶ国。でもまだまだ道のりは長いと思っています。

その後、平和学習の重要性が追加された。平和学習しましょうっていうのも、この条例の中に入っているそうです。ちょっと時間がないので、ちょっとこれも早くして、いろんな国際の国の働きがあるということですよ。

1人の力では核兵器廃絶はできないと思って何もしない。でも、まず1人の人が声をあげてあげなければ、何にもできないですよ。でもやっても駄目だからということではなくて、皆さんの力で、この条約をちゃんと批准国もたくさんできて、この条約をちゃんとした法律を作ってもらいたいと私は思っています。

核兵器のない平和な世界を目指してっていうことで、私たちが一体できることは何でしょうか。

また、被爆体験を伝承するとはどういうことなのか。

今日まさに皆さんが、この被爆体験の継承について考えていると思います。伝える。そして、伝わる。本当に伝わってるでしょうか。私も一生懸命、これをいってます。本当に伝わったかなという思いがいつもあります。

この被爆体験を継承するとは、伝える、伝わる、いろんな意味で、いろんなことがあると思います。それは皆さんで、いろいろ考えていてもらいたいと思います。

ちょっと時間がないので、こういった被爆体験とは何か、被爆者の思いとは何か、ということを終えて、私の話を終わりたいと思います。ごめんなさいね。すごく時間がないので、早口になってしまって申し訳ないと思っています。皆さんで一体できることは何だろうか、っていうことを考えてみていただきたいと思います。今日は時間がなかったので申し訳ないです。はい、これで終わります。すいません。時間がなかったので。

## 資料6

## 長崎市「家族証言者」講和 平田周氏（2018.7.28）文字起こし（46分40秒，9,969文字）

## ○自己紹介（35秒，155文字）

○平田 皆さん、こんにちは。あらためまして、長崎からやってまいりました平田周と申します。今日は、長崎に落とされた原子爆弾によって被爆した私の祖父と母のお話をさせていただきます。先ほどの山岡さんの原爆の話は詳しくされたので、私のほうは、ちょっとしか入りませんが、少し被るところもありますので、その辺はご容赦ください。

## 1. 祖父松尾敦之の肉声（1分25秒，337文字）

祖父は今から35年前に亡くなっておりませんが、実はラジオドキュメンタリーで語った祖父の肉声が残っていますので、まずはこちらからお聞きください。

○松尾 あのときに実にたくさんの子どもの死体を見ました。丸裸で、手足を縮めて、そして、道端にゴロゴロ転がっている。実に可哀想だなということを感じたのが、深くこびりついていると思います。少なくとも大人には死ぬ理由が分かっておったわけです。ところが、子どもには何のことやら全然分からなかったと思います。そういうのを殺した大人たちというものは、余程、考えなければならない、そう思うわけです。

○平田 この祖父の言葉こそが、私が結婚して、娘が生まれて、そして孫が生まれた今、あらためて原子爆弾の恐ろしさを全世界に発信しなければならないと思った原点であります。

## 2. 長崎市への原爆投下（4分15秒，1,041文字）

1945年8月9日に長崎に投下された原子爆弾は、長崎市北部の松山町、上空約500メートルで、午前11時2分に炸裂しました。核分裂で起きた爆発は、一瞬にして太陽の表面温度と同じくらいの火球を作って、先ほどもお話ありましたけども、爆心地付近の地表には摂氏3,000度から4,000度の熱線が到達したとみられています。この一瞬にしてできた火球、火の玉は周りの空気を一気に大膨張させて、凄まじい爆風を引き起こしました。爆風は爆心地から1キロメートルほど離れているところでも、秒速160メートル、時速にすると570キロ以上もの風が、建物などをめっちゃくちゃに壊しました。

こちらが長崎の爆心地付近の写真です。これが、原爆投下の2日前にアメリカ軍によって作成された写真です。爆心地付近がちょうどこのあたりになります。周りに建物びっしり建っているのが分かります。

こちらの写真。原爆投下の3日後に撮られた写真です。この円の中心が爆心地ですね。広島と同じように全く何も残っていません。何にも写っていません。もう一度比較しましょう。これが、一瞬にして、こういうふうになったわけですね。このように、原子爆弾の威力は大変凄まじいものですが、原子爆弾が他の一般の爆弾と大きく違うところは、放射線障害です。核分裂で放出された放射線を浴びることによって人体の細胞が破壊されて、様々な病気が引き起こされます。被爆直後は頭の髪の毛が抜けたり、下痢、嘔吐、出血などの放射線障害を発病する人がたくさんいらっしゃいました。それから、急にガンなどの病気を発症する人がいたり、73年経った今でも、その後遺症に悩んでる人、悩まされている人がたくさんいらっしゃいます。

この原子爆弾による長崎市の被害は、こういうふうになります。当時の長崎市の人口が約24万人。亡くなった方が7万4,000人。3分の1以上の方が亡くなられております。ケガをされた方も同じくらいの人数ですね。建物についても同様に、3分の1以上の家屋が焼失しました。このような原子爆弾による脅威に再び人類がさらされることのないよう、真実を後世に伝えていかなければなりません。しかし残念ながら、当時、実際に被爆した人たちの平均年齢は、もうとっくに81歳を超えて、ご自分の被爆体験を自らお話しするのが年々困難な状況になっています。ですから、その次の世代の私たち、そして、その次の次の世代の人たちへとバトンを引き継いでいって、未来永劫、戦争や核兵器がない世界が続くということを信じて、今日もお話をさせていただきます。

## 3. 祖父松尾敦之の紹介（2分05秒，469文字）

長崎に落とされた原子爆弾によって私の母の家族も被爆しました。こちらが当時の母の家族です。これが母の父。

私には祖父にあたります、松尾あつゆき、41歳。祖母、千代子、34歳。こちらが私の母です。長女、みち子、当時15歳。長男、海人、12歳。次男、宏人、3歳。次女、由紀子、7か月です。

簡単に家系図に表すと、こういうふうになります。祖父、松尾敦之がおります。母がいて、私へと続いております。

この松尾あつゆきという人は、若いころから荻原井泉水という人に師事して、自由律俳句というものを勉強していました。その俳句の仲間には、放浪の旅を詠んだことで有名な尾崎放哉や、種田山頭火がいます。また、あつゆきは、日ごろ、日記をつける習慣があって、たくさん日記を残していました。これらの日記は大変状態が悪くて、私個人で保存するのはなかなか困難ですので、今は長崎の原爆資料館に預かっていただいております。これらの日記には、先ほどご紹介した末の娘、由紀子が生まれたときのこと。そして被爆の様子などが綴られています。これから祖父が残した日記を基にお話をさせていただきます。

#### 4. 松尾敦之の日記による被爆体験 (33分00秒, 6,850文字)

そして併せて、昨年夏に出版したコミック、子らと妻を骨にして、のマンガもいっしょにご覧ください。昭和20年。1945年ですね。1月23日。昼食に帰ってみると、模様が悪いので産婆さんに知らせ、午後3時、めでたく安産。僕は2階で宏人を遊ばせていたが、産声を聞いて、ほっと安堵した。そのころ、雪がチラチラしてきた。夜、僕は宏人を抱いて寝る。よく聞きわけて、よかった。翌日は、僕が欠勤し、次はみち子が休んでくれることにする。とにかく、実にありがたい気持ちだ。空襲にもぶつからず、母子ともに無事であったこと。何より嬉しくてたまらない。1月24日。実に美しい雪だ。町の屋根、町の周りの山に積んだ雪が、陽に輝いていて、実に荘厳。光が、雪の雫が、この子ゆき子と名づけようかとも。ついに由紀子と命名。これはまた、あつゆきにも通ずるもの。赤い顔してすやすや寝ている。戦時中で不自由な暮らしではあったけれども、妻と4人子どもたちに囲まれた、愛情いっぱい幸せな生活に満足していた様子が日記からは伺えます。そんな中、戦争は日本にとって悪化の一途を辿って、家族は強制疎開しなければなりません。そして奇しくも移転した先が、爆心地から700メートルのところ。原爆落下のわずか4か月前のことでした。

そして、1945年8月9日、午前11時2分、長崎市上空で原子爆弾が炸裂しました。あつゆきは、そのとき爆心地から南へ3キロメートルほど離れた職場にいました。

8月9日、突然パアッと黄色い光が世界を包むと同時に、熱気がフワッと入ってきた。と、ドカーンと爆弾の音である。爆風は家全体を揺すり、窓ガラス、窓枠の散乱する音。机の下に入らねば危険と思い、入って様子を伺う。その後、あつゆきが職場近くの崖の上に上がってみると、娘のみち子が働く兵器工場あたりまで焼けているのは分かりましたが、その向こうにある自宅方面は、皆目分からない状態でした。午後の4時ごろであったろうか、県立高女に看板を出しにトラックが行くので、虫の知らせか、その仕事をやろうと便乗していく。学校に行けば、娘のみち子の消息は分かるかもしれないとの、あつゆきの啁嗟の判断でした。

そして、女学校で無事に娘のみち子と出会うことができました。そこに両手と顔を火傷したみち子がいた。起きてみて、歩ける。何ということなしに涙が出た。みち子は、当時15歳の女学生でしたが、もうそのころは学校で勉強することは許されないで、学徒報国隊として、三菱の兵器工場に動員されて、魚雷を作る仕事をしていました。その魚雷の部品を整理しているときに被爆したのです。

母も当時のことを手記に綴っていました。ガアアッとものすごい光に目がくらみ、私はまっ黄色の光に包まれ、その中でぐたぐたと体が融けていくのを感じました。次の瞬間まっくらやみの中に、ずっしりと押しつぶされている自分に気がつきました。

みち子は何かに押しつぶされていたようですが、火の手も迫ってきたので、無我夢中でもがいて、何とか這い出して、工場から脱出しました。

そのときに初めて、何か指先にぶらさがっているのに気がつきました。何だろうと思ってよく見ると、それはひじからべろりと剥けて、たれさがっている私の腕の皮でした。ちょうど、焼けていく紙が灰になる前のように、それはちりちりに縮んで、焼けこがれた私の腕の皮でした。あとには白い肉が露出して、血がふきでています。私はぞっとしましたが、それにかまってる時間は許されませんでした。小さい私のどこにこんな勇気があったのかと思うほど、力まかせに皮をひきちぎって捨てました。

あつゆきは女学校まで出てきたみち子を爆心地から少し離れていた妻の実家に連れて行って、自分自身は、午後7時ごろに、自宅のある城山へ向かいました。その日は、火災などで、普通通る道が通れなかったもので、いつもは通らない通り道を通って自宅へ向かいます。今なら1時間半も歩けば着くとは思いますが、当時は畑や川の中を歩いたり、

3時間かかって、ようやく自宅に辿り着きます。

そして、倒壊した自宅を見て呆然となりました。道下にある私の家を見下ろして、ただ呆然とする。月の下に静かに堆く倒れ重なっている材木。ああ、妻や子はこの下になっているのだろうか。足の踏み場もないほど乱暴に散乱している柱や梁を踏み越えて、家に近づく。妻や子の名を呼んでみる。何の答えもない。

月の下、ひっそり倒れ重なっている下か。

庭先の壕の中で夜明けを待つつもりで入り込み、奥のほうに手をやると、冷たい足らしきものに触れた。誰だと聞くと海人ですと言う。そのときの嬉しさ。おお、お前は無事だったか。お母さんたちはどうした。僕は園で裸になって工作をしていたらやられた。下敷きになったが、這い出した。それから、お母さんを探して回ったが、見つからないので、ここに入って寝ている。

8月10日。海人の負傷は、火傷で非常に酷い。殊に背中半分には及んでいるし、両腕にかかっているの、いわゆる3分の1以上に及んではないかとびっくりする。そばの道路を通りかかった人が、お宅の奥さんはその先におられますよと注意してくれたので、踊り上がらんばかりに嬉しく、早速、行く。八幡さまから右へ入る道路のそば。自宅から10間ぐらいしか離れていないところにいた。

千代子は、顔面、両腕、足に火傷を受けている。昨日、家を出て今道さんのお宅へ行く途中でやられ、そのままこの草の上に倒れたままで、火災の熱気や日中の暑さにも、そこから動き出す力がなく、そこで夜を明かしたのだ。宏人は大した外傷もないようだったが、間もなく脳症を起こし、手に握っていた木の枝をしゃぶって、さとうきびばい、うまかとばいと言っていたそうである。そして夕方、容態が悪化して、暴れて死んだという。

臨終、木の枝を口に、うまかとばい、さとうきびばい。

3歳の宏人は戦争中に生まれて、キャラメルやチョコレートの味さえ知らず、いつか食べたことのあるさとうきびの味が死ぬときまで忘れられなかったのに違いありません。由紀子は額に穴が開いていたが、割合機嫌よく、始終、乳を飲んでいて、今朝方、息を引き取ったという。この2人の死体をそばにおいて、千代子はいた。今にも倒れそうな千代子を助けて、壕の中へ入れ、2人の死体を庭先に寝せて、布を被せておく。4歳と1歳の兄妹2人。地べたに寝せたまま放つとくより仕方ない悲しさ。暑い陽が照りつけて、蠅が集まってくる。

昼ごろになって、今度は海人の症状が悪化します。しきりと水を欲しがるので、あつゆきが近くまで汲みに行くと戻ると、防空壕の奥にいた海人が、入り口で寝ていた千代子のところまで這い出てきて、うつ伏せになって死んでいました。笑ったような安らかな死に顔だったそうです。昨日、どうにか生き残ったのだから死なせたくなかった。海人の死は私の心に大きな痛手である。生まれてこのかた、味わったことのない悲痛な感である。海人、宏人、由紀子、営々として築いた生活。ただ子ども本意に暮らしてきた生活。全て根底から覆された。

8月11日。あつゆきは3人の子どもを火葬することにしました。海人を中央にして、右と左に、宏人と由紀子を並べる。

3人の枕元に私が火をつけ、心ばかりの火葬の札をとり、同時に四方に火をつける。風強く、すぐに炎々と燃える。たちまち吾子3人は火中にあり、私はすっかり精根尽きた気持ちで腰をおろし、応援の人からタバコをもらって火をつける。

風、子らに火をつけてタバコ1本。

8月12日。あつゆきは、朝起きてから、子どもたちの骨を拾います。わずか7か月の由紀子の骨は、か細く花びらのようだったそうです。

あわれ、7か月の命の花びらのような骨かな。

8月13日。千代子の容態はよくありません。あつゆきは千代子を両親に合わせるために、千代子をリヤカーに乗せて、実家のある柳田へ向かいますが、あつゆきは、その途中の町の惨状に驚きました。

途々見る原始爆弾による惨状。城山町より駒場町、松山町、一切のものを焼き尽くし、今日に至ると、取り片付けの済まぬ死体、走っている姿勢で黒焦げになっている子ども、牛、馬の大きな黒焦げ、焼け落ちた天主堂、刑務所。浜口町へ行くと、製鋼所、兵器製作所が見える。その鉄骨は押し倒され、ひん曲がり、大学病院の煙突は鉄筋コンクリートと思われるが、そんな空気の抵抗のあたらないようなものまでひん曲がっている。とにかく、電柱1本と言えども、立っているのはなく、建物の木片一つとして、焼け残っているものはない。山王神社は一の鳥居が倒れ、二の鳥居は半分になって1本で立ち、あの楠の大樹2本は、ほとんどそれと分かれぬほど根元だけ残り、社殿、社務所はない。ヤノヒラに着き、おばあさんに会ったときは、実に嬉しかったらしい。その夜は、久しぶりで畳の上に寝た。ところが、夜中になって、千代子は盛んにうわ言を言い出した。宏ちゃんも死にました。由紀子も死にました。海人も死にましたと、言い、夢であるか、うつであるか、幻か。

8月14日。あつゆきはリヤカーを返すために、再び城山へ向かいました。その日は倒壊した家屋の整理もあるので、防空壕の中に泊まって、翌日帰ろうと思いましたが、やはり虫の知らせか千代子の容態も気になったので、急いでヤノヒラに戻ります。ヤノヒラの玄関に入るなり、何しとったとね、姉さんが悪かよと言われ、走り上がって、千代子のそばへ行ってみた。

今日の昼ごろまでは上機嫌で普通と少しも変わらなかったが、午後から容態が悪くなったそうで、トマトを非常に欲しがり、熟したのが手に入らず、青いのを与えると、一つを別に除けて、これは宏人の、だと言って、それがちょっと転がると、慌てて膝の下に隠した。強いて横に寝せると、父が催眠薬を与えていたのが効いてきたのか、静かな寝息さえ聞こえてきた。あまり静かになったので気になり、ときどき寝息を伺っている。そして、何度も寝息を伺っているうちに、ついに息をしていないことが分かった。時に、午後9時ごろ。18歳のとき嫁いできて、18年連れ添った妻。誠に感慨深く、涙がせきあいて、とめどがない。その夜は添い寝する。

ついに妻と3児を失った。今日は妻の火葬をせねばならない。城山では、火葬を警察の出張所へ届け出ればよかったが、こちらではどんな都合か。市の出張所で罹災証明書を書いてくれたが、警察のほうはなかなか手間取って、やっと4枚の死亡証明書をもらう。焼くのは伊良林学校の校庭でよいと言う。

何もかもなくした手に4枚の爆死証明。

相撲場と芋畑のあるほうに近く、場所を決める。2、3日前に海人たちを焼いた経験が、こんなところで役立って、他の人に指示しながら木を組む。悲しい皮肉である。いよいよ木組みも終わり、その上に千代子を移し、さらに木を積み、火をつける。炎天のもと、炎々と燃え盛っていく。

そのとき、ラジオで君が代が聞こえた。しかし、そのラジオは雑音で何と言っているのかさっぱり分からない。校門を入ってきた人があるので、何の放送か尋ねると、日本の降伏だと言う。私たちは耳を疑い、そんなことがあるものかと思ったが、間違いはないと言う。涙がとめどなく流れ、今になって降伏とは何事か。妻は、子は、一体何のために死んだのか。彼らは犬死ではないか。降伏するなら、なぜ、もう少し早くしないか。わずか5日か6日の違いで、全く犬死ではないか。そこへ別の一団が来る。放送は、雑音で、結局要領を得ない。対ソ宣戦だろうと言う。多分そうだろうと、いくらか落ち着く。千代子は、段々燃えるが、体が大きかったので、なかなか時間がかかる。水を飲むでは草の上にひっくり返る。夕方近くまでかかって、ようやく焼き上がった様子だ。1人で海人たち3人分ぐらいの骨である。水を何杯もかけておいて拾うが、大変熱い。ようやく拾い終わったころは、もう陽もだいぶ傾いていた。抱いて戻って、子どもたちの骨壺と並べて、床の間に安置する。日本降伏は事実であった。ようやく戦争が終わったまさにそのときに、自分の妻には火がついて、天に向かって盛んに燃えあがっていました。

降伏のみことのり、妻を焼く火、今ぞ熾りつ。

こうして、戦争は終わったものの、日記にはさらに悲惨な日々が綴られています。

10月1日。午後、営団に行き、田中部長に面会し、辞表を提出する。割合、冷酷な感じを最後に抱いた。他の人々も、結局、去る者には冷淡である。ただ、同じ罹災者のみ、お互いに理解が届くようである。しかし、私もできるだけ淡々と振舞っておる。これで完全に家もなく、妻もなく、職もない身となった。子どもは4人のうち、3人を失った。これ以上の落胆はあるまい。世間からも、罹災者はある意味で軽蔑されている。決して同情を仰いではならない。どん底から這い上がらねばならぬと思うが、そんな気力もない。ただ運任せにして、最後は阿蘇行きを決心しているだけだ。

家族も失って、住むところも失い、経済的な後ろ盾でもある仕事を失った祖父が、最後は生活が立ち行かなくなったら阿蘇に行って自殺する覚悟であるということ、母、娘みち子に申し伝えていました。こうやって、悲しくて、悲惨な日々が始まりました。

昭和21年6月2日。雨の日曜なので、ゆっくり句を推敲したりして暮らす。あまり捗らない。原子爆弾より終戦までの句。また私自身について思う。世の中の人、私の意見を尊重せねばならぬ。彼らは私ほどの経験は舐めていないし、もし本当に私を批判しようとするならば、私の立場になってみなければ分らないことがある。結局、私の周囲には私を理解できる人を持たないだろう。口をつぐんで語らぬようにするより仕方ない。千代子たちの思い出を大切に胸にしまって、ときどき取り出して心を慰めるのがよろしい。人に聞かせても、せいぜい好奇心から耳傾けるぐらいのものだ。雨の日曜日、黙って引きこもって、誰にも会わずに、心の向くことをするのが、寂しいうちにも何となく楽しいものだ。ところがそんな話を人にしても、妙な顔しているだけだ。早よう奥さんばもらわばじゃですたいと、いうぐらいの。

本当に鼻やすく言う。ちょうど壊れた七輪の代わりに、新しい七輪を買えというふうに。哀れ、7か月の命の花びらのような骨かな。このような悲しい、美しい詩は、自慢ではなく、かえって悲しいことだが、私だけしか歌い出すことはできず、勉強してぜひ歌い出さねばならない。千代子たちを句の中に生かしておきたいものだ。そして、世の中のありとあらゆるものが、私の沈痛な心には何の魅力もない。私の沈痛な心に燃えるものを、私自ら作り出さねばならない。

私にとって、祖父とは笑った顔など見たこともないほど厳格な人でした。私が中学生、高校生のときに、祖父から勉強を教わっていたこともあって、私にとっての祖父とは、ただ単に、学校の先生。それも無駄口を一切叩かない、まるで面白味のない先生でした。私は気になって、姉と弟にも聞いてみました。お祖父ちゃんの笑った顔を見たことあんね。東京に住む姉からは、そう言えば見たことないよねと連絡が来て、弟からは、なか、と、ひと言だけメールで返事が来ました。ところが、その2、3日後に姉から再び電話があって、そう言えば、私が中学のときにメガネを作ることになって、そのときにお祖父ちゃんが立ち会ってくれたんだけど、そのときは何だか笑ったような気がするわと、楽しそうに電話をしてくれました。すいません、ちょっと花粉症で。きつと、ずっと記憶の糸を辿っていたんでしょう。たった一度だけ笑ったことがあるのを思い出して、慌てて私に電話をしてくれました。それぐらい、祖父の笑う顔なんか、私たち兄弟は見たこともありませんでした。しかし、私はあとで知りましたが、そのメガネ屋さんは、祖父の教え子の店で、私たち孫よりかは教え子たちに笑顔を見せていたのかもしれない。祖父の日記を読み進めるうちに、祖父は笑わないのではなくて、笑えなくなったのではないかと、そう気づきました。

空にはとんぼう、いつまでも年とらぬ子が隼の中。

俳句や日記の中には、私たち孫に我が子らを重ねて、いつまでも歳をとらない自分の子どもの姿を見ている、子煩悩な父親の姿がそこにいました。妻や子どもたちが次々と死んでいったのに、自分は生きている。

それは爆心地から至近距離にあった長崎商業学校の教師から、3、4キロメートルも離れている食糧営団へ転職したので、難を逃れられたからです。教え子たちを戦場に送るのには忍びず、教師とは何たるかに悩み、また校長とも対立したために転職した経緯があります。私たち孫に我が子らを重ねて、彼らが苦しんでいったのに自分だけ笑って過ごすことが到底許せなかったのだらうと思います。というわけで、語らなかったのも、笑えなくなったのも、全て原爆が原因だということが分かりました。

## 5. 母の戦後と私（5分20秒，1,117文字）

戦争が終わってからも、両腕と顔に大火傷を負っていた母みち子は、その後も生死の間を何度も彷徨いました。そして、それを懸命に祖父が看病してくれました。しかし、先ほど日記の中にもあったように、祖父は長い間仕事を休んだということで、職場を解雇同然に辞めざるを得なくなりました。戦後、大腿、お尻の下あたりの皮膚を腕に移植する手術を受けて、母の腕には、こうやってケロイドが残ったものの、生き延びることができました。しかし、赤血球の数値に異常があるなどの原爆症に悩まされて、生涯、大量の薬を飲み続けなくてはなりません。やっとのことで生き残った人たちにも、大変な生活が待っていました。戦争とはそういうものだと思います。そして、私が27歳のとき、今から33年前になりますが、母は55歳で突然亡くなってしまいました。祖父もその2年前には亡くなっています。

祖父も母も、自分の被爆体験を後世に伝えなければならないとの思いで、祖父は原爆のことを詠んだ俳句集を出版して、また、母は語り部として、長崎にやって来る修学旅行生たちへ平和の大切さを伝える平和活動を、死ぬ直前まで、それこそ死ぬ前の日まで続けていました。ですから、私は彼らの意思を継いで、73年前に起こった悲惨な出来事を、こうして広く、また正確に伝えて、原子爆弾をはじめとする核兵器がこの世からなくなるよう、また、世界中が平和になるようにずっと訴え続けていかなければならないと、私はそう思っています。ひとたび戦争が起きると、それまで正常な判断をしていた人たちまでもが、取り返しのつかない行動に移ることもあります。そしてその結果、何の罪もないたくさんの命が奪われます。国と国との間では、政治的に、歴史的に、経済的に、様々な対立があるとは思いますが、大きな国であろうと、小さな国であろうと、私たち1人1人の気持ちや、生活や、命を大切にしてほしいものです。世界中が一つになることこそが私の願いです。戦争は必ず避けることができるはずで、人類が二度と過ちを犯さないよう、今を生きる私たち、ここにいる私たちが心をつなげていかなければならないと、私は強く思っております。

最後になりますが、今日お話しした祖父の原爆の句碑が、長崎の原爆資料館の前にありますので、ちょっとここからは遠いですが、もし長崎に行かれるような機会があれば、ぜひ探してみてください。テレビドラマの中で、今、人気がとてもある高橋一生さんも、この句碑の前で撮影をされていました。この句碑の前で、今日私がお話ししたことを、少しでも生かしてくれたら、私はとても嬉しいです。以上です。

私の話はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

#### <質疑応答>

○男1 折角の機会なので、お二人のほうに何か聞きたいことあれば、何でも言ってもらってください。

○男2 本日は大変貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます。秋田大学の4年、菅原巧と申します。山岡さんのほうに一つご質問があるのですが、山岡さん、本日の時間が足りなくて。山岡さん、英語が堪能で、海外の方にお話をする機会があるってことなんですが、その経緯についてお聞かせできないかなというふうに思います。先ほど、山岡さんが一番初めにおっしゃられた、なぜ原爆が落ちたのかを考えてほしいということ、僕なりに考えてみたんですが、決してアメリカの方の中で考えてる方が少なからずいるような、戦争を終わらせるために落としたというようなことではなくて、もっとデータを取るといような側面があったのかなというふうに思いました。山岡さんのお話を聞いた海外の方がどういったふうに考えるのかというような経験を教えていただきたいです。

○山岡 アメリカの高校生、大学生、ちょっとやってるんですけど、彼らの習っていることは、原爆投下によって戦争が終わったと。日本人も助かったんだよってのを勉強しているそうです。原爆の被害についてほとんど知らされてなくて、私が今日言ったのと、ほとんど同じように英語でやってるんですけど、みんな、原爆投下は必要じゃなかったっていうのを認識して、アメリカへ帰られる人が多いです。ほとんどの教科書なんかでも、原爆投下は正しかったということばっかりですね。でも、実際問題、私が今67歳なんですけども、私たちの時代では、教科書に原爆のことについては、ただ8月6日広島、9日長崎、そして8月15日、原爆投下じゃなくて、終戦っていうことで、私は原爆投下によって戦争終わったと、このガイドをするまで思っていました。必要だったんだと思ってたんです。親たちにも聞いてみると、そう思ってたらしいです。あんな悲惨な原爆投下によって、戦争が終わったということを思ってるから、よくよく考えて、よくよく調べてみれば、原爆投下は必要ではなかった。その当時は、さっき言ったように、空襲によってほとんどの市や町は破壊されていたのと、食糧もなくて、戦う軍備もなかった。それなのになぜしたのかっていうのが、ヤルタ会談からポツダム宣言から、歴史を、皆さん調べてみれば分かると思うんですけども、そういうのは必要ではなかったというのが、最近のアメリカの学生たちも段々分かってますし、ヨーロッパからくる学生たちも、違うんだよって、最初指摘されたのは、日本人なのに知らないんだね、必要なかったんだよっていうのはありました。私が当時、するときに。そういうことをいろいろ考えると、アメリカの人たち、10年ぐらい前は70パーセント、もっと多いかな。80パーセントぐらいの人たちが、原爆投下の正当化してましたけども、今、ほとんど60パーセントの人たちが、投下は必要ではなかったということは言われますよね。みんな、びっくりして帰られます。それでよかったのかな。他にはないでしょうか。

○男2 ありがとうございます。

○山岡 私、英語できなかったんですよ、本当の話。10年前、英語ゼロだったんですよ。主人が死んで、ドームの前でガイドしていたら、Where are you from? って言ったら、どっかって言うんですよ。私に、ここに住んでのかかって。Where is Museum? と言っても、私、そこまでも答えられなかった。アーンと言うぐらいで。原爆ドームの前でガイドするには、必ず英語が必要だということで、中学生の基礎英語を1年間一生懸命勉強して、中学1, 2, 3をしたら、2年、3年したら、ほんとに喋れるようになったんですよ。嫌いな英語が。本当に大嫌いで、高校時代、10段階、2か3ぐらいで、できなかったのが、やって。みんながよく私に質問があるのは、なぜそこまで英語ができるようになったのかってというのは、伝えたいことがあった。私は知らなかった。原爆のことについて本当に知らなかった。でも、知れば知るほど、これは伝えないといけない。そういうことで、これは自分で勉強しないといけない。だから、結構、原爆のことについて詳しく日本語でやってるし、英語でもやってるんですよ。知れば知るほど、これを伝える。英会話もちょこっと習いに行っただけでも、いいことにはならなかった。じゃ何がよかったのかって言うと、何か伝えたいことがある。何かこれを伝えたいっていうことがあれば、英語って、伝えることができるんだっていうのが分かりました。その当時、ときどき今でも、新聞にたくさん載ったり、女性セブンにも載ったり、いろいろしてるんですけども、英語のできなかった人が英語でやってるっていうことでね。今日見せたパワーポイントの英語バージョンにもやっています。45分間、英語ひたすら。英語も、市に出して、全部添削されるんですよ。この単語がダメとか。それ全部、45分間覚えなさいといけないんですよ。覚えずにやると、ノーリーディングって書かれるんですよ。あなたのプレゼンテーションいいんだけど、読むではダメだと。全部、覚えてくださいっていうことで、67歳のおばあちゃんが、一生懸命、英語をしますので、ぜひ皆さんも、英語で、世界の人たちに伝えてほしいなと私は思っています。

○男1 その他はどうですか。

○男3 本日は、本当に貴重なお話をありがとうございました。秋田大学2年生の大堤です。自分は秋田県の土崎という地区に住んで、土崎空襲の話も小さいころから聞いたんですけども、土崎空襲もそうなんですけども、この広島とか長崎の原爆の話って、意外とリアルと言いますか、具体的な写真とかが出てきて、自分は小学校のときに、その写真とかを見て、危機感というか、トラウマというか、戦争を勉強することに対して嫌だっていう思いを持ったんですけども、今、自分のこの歳では大丈夫なんですけども、小学校の教師を自分は目指しているんで、小学校でそういったものを教える際に、気をつけるべきこととか、伝えるためにはどのようなことに配慮したほうがいいのか教えていただけたらなと思います。

○山岡 今、私、小学生の日めくりガイドとか、そういうのをやって楽しんでいます。小学校の先生とお話するんですけども、やっぱり真実を正確に伝える。原爆物語を作ってはいけません。得てして、原爆物語を作るんですよ。というのは、こう話してますよね。向こうはびっくりした顔。じゃあもっと大きく話を膨らませたら、もっとびっくりした顔をした。たとえば、さっき言った3,000度から4,000度の熱。伝承者も悪いんですけども、被爆者も必ず言うんですよ。皆さん、3,000度、4,000度の熱ですよ。鉄の融ける温度が1,500度です。皆さん考えてみてくださいって言ったら、みんながびっくりした顔で、えーって顔をするんですよ。そこで、みんな止めるんですよ。止めちゃいけない。一瞬ピカッと光ったときだけです。当たったところが3,000度、4,000度で、影は3,000度、4,000度にはなりませんってことは言わないんです。だから、小学生に聞いた場合に、3,000度、4,000度、熱が出ました、みんなどう思うって聞いたら、人間、融けたと思う。融けた。じゃあ、資料館の写真を見てねとか、そういうことも言います。真実を伝える。話を作ってはいけません。話を大きくすれば大きくするほど、聞き手はすごいびっくりして、ああ、すごいと引き込まれるかもしれないけども、それではいけないと思うんですよ。正確に話をします。今日、平田さんの話を聞くと、お祖父様の日記を読まれて、一番正確ですよ。ああだった、こうだった。それが一番正しい伝え方だと思う。私の母から聞いた話でも、ひょっとして違うんじゃないかなということもあります。たとえば、岡田さんから聞いた話、被爆者、いろんな人の聞いた話を、ちょっと違うよね、これ本当に正しかったのかなって思う。それは何十年前の出来事を正確には覚えてないですよ。いろんなメディアからいろんな情報が入って、ああそうだったかもしれない、ああこうかな、そういうちょっとした考え方が違う。じゃあ、私たちは、あなたたち、先生となる人たちは、何を伝えるのかってというのは、これ合っているのだろうか、そういうことをもう一度考えないといけない。たとえば、今日私が言ったことが、全て正しいとは思わないでほしい。これ正しいのかなと思ったら、自分で調べる。

私もよくいろんな話を聞きます。あっ違うんじゃないかなと思ったら、すぐ資料館の学芸部に行って、これはどうなっているのかということも必ず調べます。だから、今日私が喋ったことが全て正しいと思わないでほしい。自分でおかしいなと思ったら、自分で調べる。その調べ方、何かいろんな方向から調べることによって、真実が分かってくるのではないかなと思います。私、今日の平田さんの話を聞いて、日記を、そのまま、こう言って。絶対それが正しいと思う。私たちが、ただ被爆者から話を聞いてそのまま言って、ちょっと違うんじゃないかねっていうことが、今まで何回もあったし。だから、敢えて、被爆者の話を、全部、この人が言うのは正しいと思わないときがあります。でも、被爆者の人は、大変なことを経験してきてるんですよね。たとえば、本当に母もよく言ってました。分からん、分からん。見にゃ分からんって言うけども、本当に苦しい場面を通り過ぎてきてるから、だから被爆者が、あなたもそうですねとは、私は言われなと思う。それだけの苦勞をしてきた。今日の日記に書かれてる、何日、何日。これすごいいいなと私はつくづく思いました。これ正確です、ほんとに。だから原爆の手記で、一番最初に書いたものが一番正しいんだよっていうのは、葛西先生って、広大の教授が言ってました。一番最初に書いた手記が本当は正しいんだよって。最近書いたのは、いろんな情報が入るから、これは間違ってる情報もかなりあるっていうことをよく言われます。でも、私たちは、決して被爆者の人たちに対して、違うんじゃないですかとは言えない。その人はすごい大変な苦勞をしてるから。でも、伝える私たち、あなたたちは、それが正しいか正しくないかというのを自分で考えて、調べて、正しいことを、小学校の先生になったときには、生徒たちに伝えてほしいなと私は思っています。

○男1 平田さんはどうですか。

○平田 今の小学生にお話するときの話をされてましたけど、実は、先々週だったですか、愛知県の小学校でお話をしたんですけども、その打ち合わせの際に、市役所の人から事前にこのスライドを見せたんですよね。小学校のほうから、これは外してくれとかいう依頼があったら、削除してくれますかというお話があったんですよ。今までそういうこと言われたことはなかったんで、どうしようかと思ったんですが、一番聞くのは小学生なんで、どうしても学校のほうが、そういったことを強く言われるのであれば、考えてはみますという返事はしておいたんですが、結局、その市役所の人と小学校の先生と話されて、小学校のほうは、ありのまま伝えてくださいということで、内容は、今日お見せしたスライドとほとんど同じです。話す言葉は、少し簡単にしましたけども。小学生は黙って静かに聞いてくれました。いろいろ怖い話を聞きたくないとかいうのを心配されたのかと思いますけども、そういったこともなかったと思います。それと、先ほどの日記の話ですけども、今日ご紹介した日記は、昭和20年9月20日から日記を再開してるんですよね。被爆してから、それまでは全然書く余裕はなかったと思います。次の日記が9月20日に始まるんで、9日から15日までのことは、おそらく9月20日以前に書いたんじゃないかなというふうには私は思ってる。ですから、書いてあることは、先ほどもお話しましたが、正しいと思って、それをそのままお伝えするようにはしています。ここにいろんなことを付け加えると、また話が大きくなってしまうと思っていますので、真実を伝えるということを私は心がけています。以上です。

○男1 その他、どうですか。こっちから指名しちゃうのもあれですけども、島山さんどうですか。

○女2 秋田大学教育文化学部4年の島山彩音と申します。本日は貴重なお時間ありがとうございました。質問ではなくて、感想になってしまうんですけども、私自身、戦争について、これから教師を目指す身であるんですけども、子どもたちに教える立場を目指す者として、もう少し知識を身につけていかなければならないなというふうにも実感しました。山岡さんの、最初のほうに、過ちを繰り返さないために、もっと戦争のこと知らなければならぬというふうにあったと思うんですけども、それが本当にその通りだなというふうに感じまして。子どもたちがどう感じるかというのは、それも人それぞれだと思うんですけども、私自身も知らなければならぬし、もっとこちらから、子どもたちにも伝えていくことが、戦争っていうものをこれからなくしていくことを目指すにあたって、必要になってくるのではないかなというふうに感じました。それから、平田さんの話についてなんですけれども、あつゆきさんが笑わなくなったところからなんですけれども、原爆で当時亡くなった方はもちろん、生き残った方も長い間苦しみを続けたということで、原爆の被害は一時的なものではなくて、今も続いてるっていうことも、子どもたちに伝えていかなければならないなというふうにも感じました。どうもありがとうございました。

○男1 じゃ、一応これで。最後に、お礼の意味を込めて、もう一度拍手をお願いします。皆さんも、長時間にわたって、どうもご苦労様でした。アンケートのほう、ぜひ提出するようにしてください。よろしくをお願いします。お疲れさまでした。

## 資料 7

おかだ えみこ  
岡田 恵美子さんの被爆体験

## プロフィール

1937年(昭和12年)1月生まれ。

国民学校3年生の8歳のとき、尾長町の自宅の庭(爆心地から2.8km)に出て、2人の弟と一緒にB29に手を振っていたときに被爆。

女学校1年生の12歳の姉は、動員学徒として建物疎開作業中に被爆し、死亡。

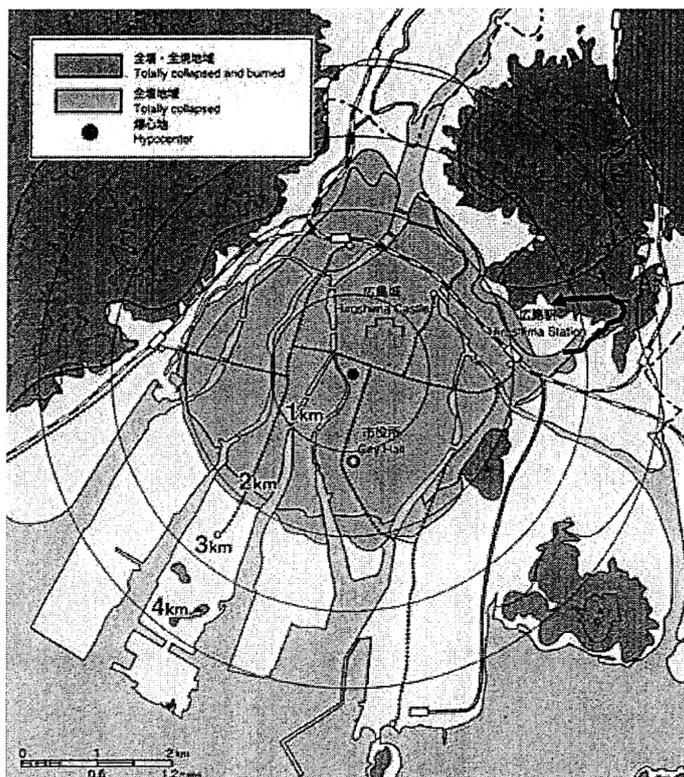
元ピース・ボランティア

## 被爆の状況

母と2人の弟と朝食を食べていたとき、飛行機の爆音を聞いた。空襲警報が出ていなかったため、二人の弟は日本の飛行機だと思って、庭へ出た。私も庭へ出たときに、きらきら光る飛行機を見た。そのとき、「ピカー」と光り、「ドーン」という衝撃で地面にたたきつけられた。1人の弟はやけどを負った。壊れた自宅から、母が全身から血を流しながら出てきた。同時に、火災が発生したので、母に連れられて、弟と山手に避難した。崩れた建物の中から助けを求める声があったが、どうすることもできなかった。被災者は、衣服が焼け落ち、やけどでばんばんに腫れ上がり、真っ黒になった体で避難していた。防火水槽に頭を突っ込んだ死体もあった。避難の途中、激しい腹痛に襲われ、嘔吐を繰り返した。ようやく、二葉山のふもとに着いた。そこには、多くの被災者が避難してきた。夜、市内は真っ赤に燃えていた。

翌日朝、辺りを見ると、かろうじて避難した被災者の多くが亡くなっていた。母は帰ってこない姉を捜すため、何日も市内を歩いたが、手がかりはなかった。弟のやけどの跡にうじがわいたが、薬がないので、母が人骨を粉にして塗った。私は頭髮が抜け始め、倦怠感が続いた。

## 被爆後の経路



【8月6日】

尾長町(自宅)



大内越峠



二葉山のふもと



8	世界中で核兵器をなくそうという取り組みがされている一方で、いまなおボタン一つで世界中の平和抑止力による平和があり、武力に頼った平和ともいえる。その為、武力の頼らない本当の平和を、常に考えていかなければならない人間の宿命だとも考える。それは、人間の歴史には戦争がつきもみだから、過去の人が考えてきたように、現代に生きるもの、これからをつづいていく者も皆が経験しなければならぬと考えた。	被爆体験者の平均年齢が81歳をこえていること、これからは引き継いでいく者がこれからの世代にならなければならないこと、こういう貴重な講話の機会を機に世代が大切にしていかなければならないと思ふ。さらに、どうこれから伝えられることができるのかを考えていかなければならないと思う。熱帯によった皮膚がタラッとただれだれといた感じが、広島・長崎に行った時に絵で見たことがあり、長い時間ずっと見ていた記憶があったが、話を聞いて自分の皮膚をひきちぎってでも動く様子は想像を絶するし、想像すらできないほど、つらくひどい風景であったのだからと感じた。
9	原爆のおそろしさを改めて感じてきました。核兵器をなくすために一人一人ができることはなにかを考えていきたいです。	
10	原爆投下の効果を測る測定器、1年前からの投下練習、投下ポイントの確認など用意周到な計画の下実行されたことがよく分かった。	
11	この語りを継承していくことは容易ではないと感じた。自分が教壇に立った時、ここで聞いた話を子どもたちの前で話すのは、簡単なことではない。被害者の思いや被害者家族の平和への思いなど、全てを受け継ぐ覚悟が必要だと思ふ。しかし、それを学んでいくことが、平和への一歩だと思ふ。	あつゆきさんの実際の気持ちをつづった俳句をもとに伝えていて、こういった伝え方も良いと思ふ。原爆は落ちた時だけでなく、生き残った人も苦しむ続けたということを実際の句で見て、考えることがたくさんあります。"小学校の子どもたちにも伝えていかなければいけないなと思ふ"。
12	原爆やその被害については学校の授業で学習するにとどまらず、話を聞く中で、戦時中の広島の人々の様子などについて知ることができた。また、原子爆弾=戦争を終わらせるために投下されたと思ふこと、違つと知り衝撃を受けた。アメリカの学生が被害についてあまり知らないということも聞き、真実を伝えていかなければならぬと感した。	平田さんの祖父の日記をもとに話を聞き、事実に基づいたあつゆきさんやその家族、周囲の人々の様子を、投下から終戦までを追従しながら知ることができた。戦争を体験してきた世代は高齢化が進み、我々が引き継いでいかなければならぬ。広く正確な事実を伝えていかなければならないと感じた。
13	これまで原爆が落とされたことは、戦争を終わらせるために必要なことであると考へてきたが、戦争が終わるために必要なことだとなったというより核実験の一環だったと知り、とても貴重な話を聞いていただけたと感した。	松尾あつゆきさんの話を聞いて、戦争の虚しさを感じるとともに戦争に対して怒りを感じた。このような過ちは二度と起こしてはいけぬと考へた。そのために、教師として必要なことを大学生生活だけでなくこれからの人生で考へていきたい。
14	今、北朝鮮とアメリカを中心に北朝鮮の核実験の観点を中心に緊張が高まっている。そのことを唯一の被爆国である日本の国民として教えていきたい。	松尾あつゆきさんの詩には、むなしさ、やるせなさを感じられています。平田さんの静かな語り口調が、戦争がもたらした虚無感をより重厚にさせているようで、重くのしかかってくるようでした。
15	戦争を生きている人々の生活は、あくまでも日常であり、その日常が日常として成り立っていることには非伝承者の方々の話を聞くのは今回が初めてでした。貴重なお話をありがとうございました。	あつゆきさんの生活に基づいたお話しは、とても切実性がありました。日記という形式をとっていた点でも、原爆の悲惨さを日常に絡めて伝えていられるように感じました。
16	「週刊」について戦争全への誓いの言葉であるということがとても心に響きました。この言葉には戦争について様々な角度で考へなければならぬという意味が込められていると思います。このようなたことを危重に持ってもらうために、教師の伝え方としては、真実をありのままに伝えることが大切だと思ふ。	あつゆきさんが笑わないう美えなくなったというお話もかなり印象に残りました。
17	原爆の被害者の体験だけではなく、当時の状況や原爆にまつわり話もあり、当時のことを知るものが出来ました。私も関係ないとは思わず、この日本で起きたこととして真剣に考へていきたいと思ふ。今後、広島にまつわる授業を行うので、とてもいい勉強になりました。	被爆した方、被災した方の心身のダメージを感じ、心が痛かった。戦後73年は長いようで、時が止まった人にとっては今も一瞬で当時に戻ってしまうのだからと感した。
18	私は、この話を聞くまで、広島原爆の悲惨さが分かっていませんでした。自分のこととして捉えることが、このお話を聞いてから少し変わったように思ふ。秋田まで来てくださって本当にありがとうございます。教師になったら、ことどもたちにも伝えていきたいと思ふ。	「平和」や「戦争反対」といった一言で表せない感情を抱いた。戦争の加害・被害を4年間で様々な見えてきて、私は社会科教育に携わっていく中で、「平和」をどうとらえていくべきか、自分なりの答えを出さなければならぬと思つた。

<p>19</p>	<p>被害を受けた日本だけでなく、加害者のアメリカがその時どういった作戦行動をとったのか、客観的に話されていた意外という心境を受けた。広島に行ったことのない私でも、広島も土地、現在と過去、そして未来への思いが伝わってきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平和についての思いがまっとうの間、あつとこの1時間であった。</li> <li>・初めて原爆の事実を語り、最後の方で自分の言葉で核兵器(平和・戦争)に対する山岡さんの考えを語ってくたさう、大変心に響くものであった。</li> <li>・「助けてあげられなくてごめんね、」「平和公園は大きな大きなお墓」「安らかに眠ってくださう、過ちは繰り返してあげられなくてごめんね、の過ちとは何か」などの言葉が、やさしい言葉でありながら深く深く届いた。重い思想が語られた言葉であったと思う。</li> <li>・ありがとうございます。</li> </ul>	<p>とても、同情をし尽くしても同情になり得ない、壮絶な記録だった。「花びらのような骨」「四枚の爆死証明」…今まで経験したことのない話し方で、それなのに自分でも驚く程心痛し、無情の気持ちで溢れてきた。改めて、今日御話を聞く事が出来た良かったと思えました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平田氏のお話に、そのあまりの悲しみと魂の祖父の体験の身に言葉がありません。松尾あつゆき氏の自由律俳句、日記に心を打たれ、その家族の悲しみを一身に背負い語って下さった平田氏の「語り」は、多くの方々へ平和のために行動することの大切さを喚起していることでした。</li> <li>・「なにもかもなくした手に四まいの爆死証明」胸につさきささりました。</li> <li>・平田氏のお話を聞きながら「戦争が敵下の奥に立っていた」(渡辺白泉)の俳句を思い起こしました。</li> <li>・ありがとうございます。</li> </ul>	<p>今の世代から受け継いでいかなければならぬもの、次の世代へ伝えていかなければならぬもののがたくさんあります。特に平和を強く願う思いは、ぜひとも伝えていかなければならぬものなのです。だからこそ、今回のお二人のお二人の戦争体験の「語り」の継承が大切になってくると思います。おふたりの「語り」にとっても心が打たれました。</p> <p>広島・長崎の被爆体験は、これからは大切に引き継がれてほしいものです。</p> <p>秋田がどうなっているのか、現状がわかりません。</p> <p>土崎空襲を伝える方はいらっしゃるものとこと。(女優の浅利香津代さんが「はまなすはみた」という絵本(土崎空襲について書かれたもの)を毎年秋田市の小学生に朗読してくださっています。これも、戦争体験「語り」の一つの形でしょうか。正確に伝えるということでは、様々な考えもあるでしょうが)平田さんの静かな口調による語り(日記をもとに)、このように「語り」もあるのだなあと思えました。山岡さんの「伝えたいことがある」という強い思い、伝わりました。</p> <p>山岡さんの「伝えたいことがある」という強い思い、伝わりました。</p> <p>お話し合い出来なくてごめんね、申し訳ありません。</p>	<p>昭和19年生まれの小生にとつて決して当事者としての話はムリであるが、日々、心静かに記録として長文を残してくれたと思つた。</p> <p>日本人は知らなさすぎる。</p>
<p>20</p>	<p>被害を受けた日本だけでなく、加害者のアメリカがその時どういった作戦行動をとったのか、客観的に話されていた意外という心境を受けた。広島も土地、現在と過去、そして未来への思いが伝わってきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平和についての思いがまっとうの間、あつとこの1時間であった。</li> <li>・初めて原爆の事実を語り、最後の方で自分の言葉で核兵器(平和・戦争)に対する山岡さんの考えを語ってくたさう、大変心に響くものであった。</li> <li>・「助けてあげられなくてごめんね、」「平和公園は大きな大きなお墓」「安らかに眠ってくださう、過ちは繰り返してあげられなくてごめんね、の過ちとは何か」などの言葉が、やさしい言葉でありながら深く深く届いた。重い思想が語られた言葉であったと思う。</li> <li>・ありがとうございます。</li> </ul>	<p>今まで色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>	<p>小学生の頃(昭和28年か29年)広島映画をみました。今、身近に講話の内容をメモもとらずに聞き流しているのが初めて知る事がいかに多いか、秋田と広島の違さもあるが日本国民全てに知識として知らせるべきです。</p> <p>それにしても当事国が核兵器批准から遠ざかっているのはおかししい！</p>
<p>21</p>	<p>被害を受けた日本だけでなく、加害者のアメリカがその時どういった作戦行動をとったのか、客観的に話されていた意外という心境を受けた。広島も土地、現在と過去、そして未来への思いが伝わってきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平和についての思いがまっとうの間、あつとこの1時間であった。</li> <li>・初めて原爆の事実を語り、最後の方で自分の言葉で核兵器(平和・戦争)に対する山岡さんの考えを語ってくたさう、大変心に響くものであった。</li> <li>・「助けてあげられなくてごめんね、」「平和公園は大きな大きなお墓」「安らかに眠ってくださう、過ちは繰り返してあげられなくてごめんね、の過ちとは何か」などの言葉が、やさしい言葉でありながら深く深く届いた。重い思想が語られた言葉であったと思う。</li> <li>・ありがとうございます。</li> </ul>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>
<p>22</p>	<p>被害を受けた日本だけでなく、加害者のアメリカがその時どういった作戦行動をとったのか、客観的に話されていた意外という心境を受けた。広島も土地、現在と過去、そして未来への思いが伝わってきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平和についての思いがまっとうの間、あつとこの1時間であった。</li> <li>・初めて原爆の事実を語り、最後の方で自分の言葉で核兵器(平和・戦争)に対する山岡さんの考えを語ってくたさう、大変心に響くものであった。</li> <li>・「助けてあげられなくてごめんね、」「平和公園は大きな大きなお墓」「安らかに眠ってくださう、過ちは繰り返してあげられなくてごめんね、の過ちとは何か」などの言葉が、やさしい言葉でありながら深く深く届いた。重い思想が語られた言葉であったと思う。</li> <li>・ありがとうございます。</li> </ul>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>
<p>23</p>	<p>被害を受けた日本だけでなく、加害者のアメリカがその時どういった作戦行動をとったのか、客観的に話されていた意外という心境を受けた。広島も土地、現在と過去、そして未来への思いが伝わってきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平和についての思いがまっとうの間、あつとこの1時間であった。</li> <li>・初めて原爆の事実を語り、最後の方で自分の言葉で核兵器(平和・戦争)に対する山岡さんの考えを語ってくたさう、大変心に響くものであった。</li> <li>・「助けてあげられなくてごめんね、」「平和公園は大きな大きなお墓」「安らかに眠ってくださう、過ちは繰り返してあげられなくてごめんね、の過ちとは何か」などの言葉が、やさしい言葉でありながら深く深く届いた。重い思想が語られた言葉であったと思う。</li> <li>・ありがとうございます。</li> </ul>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>	<p>今までの色々な角度から広島、長崎の原爆については一応の知識としては受け止めてはいたのですが、生でお話しするのはなかつたので戦後生まれながら72才という年齢になり大変良い機会に巡り会えたと思つて拝聴させて戴く事に致しました。実は私の生まれ地土崎という地にも原爆ではないものの爆撃を受けたという現実があり、父か母が運悪くそこに居たら私という存在はなかつたのだと改めて思い到りました。ちょうど終戦の日の未明だったそうです。どうぞ今後も戦争ということが是非現実ではなく、いつでも起こりうるという事を若い人に伝え続けて下さる事を切にお願い致します。最後まで聞かれなくなりましたが、ありがとうございます。</p>

・2018(平成30)年7月26日の講話直後に記入してもらつたアンケートから作成。  
 ・原文全部掲載。文字強調箇所を強調した。